



紀伊國名所圖

後編

五之巻





紀伊名所圖會後編卷之五

目錄

- 日高郡 日高郡 水高
- 原谷驛 原谷驛 水高
- 古城址
- 東光寺
- 萩原 萩原 水高
- 大東宮
- 鳳生寺
- 九品寺
- 湯川略傳
- 王子權現
- 鳥山政氏故所
- 古郷名
- 御所谷
- 内畑王子
- 高家王子
- 八幡宮
- 西圓寺
- 古墳
- 法林寺
- 湯川庄司
- 徳生院
- 三尾莊
- 高家莊
- 鍵掛王子
- 内原御
- 法華寺
- 淨尊寺
- 富安莊
- 道成寺道
- 湯川氏故所
- 志願莊
- 徳幸行者園
- 官杭
- 小崎
- 馬留王子
- 内原直
- 安樂寺
- 若宮
- 富安王子
- 小原驛 小原驛 水高
- 龜山古城蹟 龜山古城蹟 水高
- 若一王子
- 三宅社
- 小浦凌 小浦凌 水高





御靈宮  
 若一王子  
 中子磯  
 光徳寺  
 沖崎洞  
 風早  
 小池元  
 和田松原  
 入山古城址  
 王子社  
 園莊  
 沖坊  
 千津川

常燈臺  
 比升城蹟  
 産湯井  
 緯突  
 かみ石  
 龍王社  
 沖崎社  
 王子社  
 女郎墓  
 法光院  
 新宮文書  
 矢田莊  
 雲湊山王子

甲山  
 大将軍社  
 榕樹  
 沖津三石  
 美保浦  
 海士取嶋  
 智浦  
 若一王子  
 賊部莊  
 春日社  
 園八幡宮  
 折縁後出図  
 八幡宮

比升湊  
 斎殿松  
 白鬚明神  
 日御崎  
 三保窟  
 雷明神社  
 二尾山  
 財部寺  
 寺  
 正平草  
 くさぬ王子

紀四編五ノ一

鐘巻  
 古鐘銘  
 別里  
 江川谷  
 丹生社  
 山神地  
 冷川  
 洞龍  
 朝日社  
 芳澤わめ園  
 下愛徳社  
 大龍

道成寺  
 梅大樹  
 八幡宮  
 正八幡宮  
 山王社  
 玉皇氏故居  
 玄子川  
 松津社  
 観音寺  
 鳴瀧  
 長子八幡宮  
 建保縁起  
 寒川

鬼瓦圖  
 安塚塚  
 寶篋印塔  
 眞妻社  
 生蓮寺  
 城ヶ段  
 早蕨社  
 雄山  
 船津  
 矢苦嶽  
 掃子社  
 寒山莊  
 手早瀧

縁起  
 清姫塚  
 川上莊  
 眞妻山  
 大峰山  
 大山神社  
 信業寺  
 喬麦  
 黒嶋瀧  
 鶴川瀧  
 神場温泉  
 上愛徳社  
 丹生神社



鶴が城  
 龍神温泉  
 川鳥  
 湯野  
 釜茶屋  
 園場  
 龍神温泉  
 檜籠造園  
 殿垣内  
 小森  
 亀田漬  
 温泉寺  
 野垣内  
 龍神温泉守殿  
 復興壇  
 津久井  
 水乞鳥  
 伏久間橋  
 茶研坂  
 城森

**日高** 當郡立田郡の南小町にて南ハ紀伊郡と界一東ハ  
 大和國吉野郡十津川郡と隣り西ハ海小瀬也

**坂高** 倭國本紀大寶三年此條小坂高と書き坂高此  
 此川流名不用おもて日高と書る小同

**氷高** 同書小天平寶字八年此條小氷高と書き  
 氷も此の川流名小て同言しとる小なる

**古御名** 和名抄小載る高野郡内原城は清水石剛  
 全戸南にありて云々なり

**高家莊** 立田郡と麻山を塔  
 と次之墨村を記す

**小作** 原谷村より分れて麻  
 山の峰小茶店あり

**原谷驛** 在田郡河津村より一里半麻山麓の林茶谷の内北より東にありて  
 長々八十丁餘の間に村居敷在せり赤子里人の波小系八十町の野

**御所谷** 系谷村の良光三三町麻山の西十に八町小  
 御所記

**十日** 過之ノセ推原樹陰滋路甚狭於此邊有益養御所  
 云又私同儲之暨休息山中小食於此所上下伐木技隨

**分造** 植付神枝持参内ノハ夕ノ王子  
 童云 各結付之云

**遊掛王子社** 麻山麓の藤小町に傳幸紀小麻山を  
 城て参皆カケ王子とありて此社なり





源谷驛





○馬留王子社 系谷村の小名

○古城址 系谷村の内中紀下紀二ヶ所小の所を一時崎山

○内畑王子社 系谷村の小名内の畑よりなりて今古名なり

○内原郷 和名御坂内原とあり厚と原の混りり以郷今廢せり

○内原直牟羅 此地の人ナリ内原直牟羅姓未定雜姓云

天平實字八年丁未先是從二位女室真人淨三等奏曰伏奉去年十二月十日紀寺奴益人等訴云紀表邪臣之女粃賣嫁本國水高評人内原直牟羅生兒身賣拍賣二人蒙急則臣處分居住寺家造工等食後至庚寅編戶之歲三細技數名爲奴婢因斯久時告愆分雪無由空歷多年干今屈滯

紀四編五、四

幸屬天朝照臨寓内披陳鬱結伏望正名者 中於是益麻呂等十二人賜姓紀朝臣真玉女等五十九人内原直即

以益麻呂爲戸頭編附京戸云

天平五年九月六日畧同日符壹通 熊谷團兵士紀打原直忍熊意宇團兵士

以九月十三日到國云 抄以る小打原直

○東光寺 系谷村の小名小

○高家王子社 小名東光寺あり

○法華寺 系谷村の小名

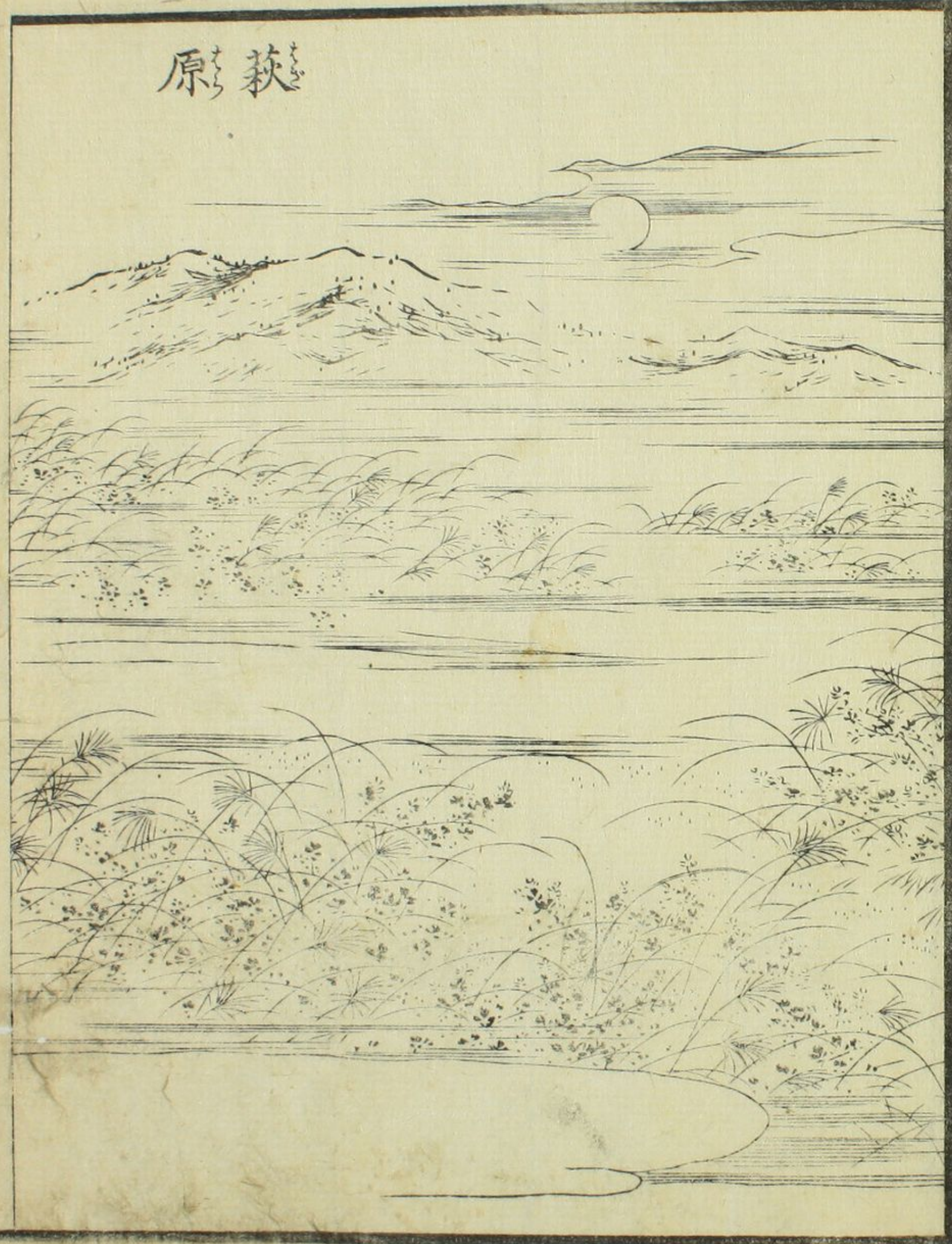
○安樂寺 系谷村の小名

○萩原 内知れぬ小名なり

○法華寺 系谷村の小名



萩原



新千載集

萩原

定家

此へよき

聖徳太子

くはらゆ

あしき

あつた月

按ふ小御幸記初回  
王子御舎の條より  
聖徳太子の頃あり  
りて飲文たりと恐  
らくは萩原より

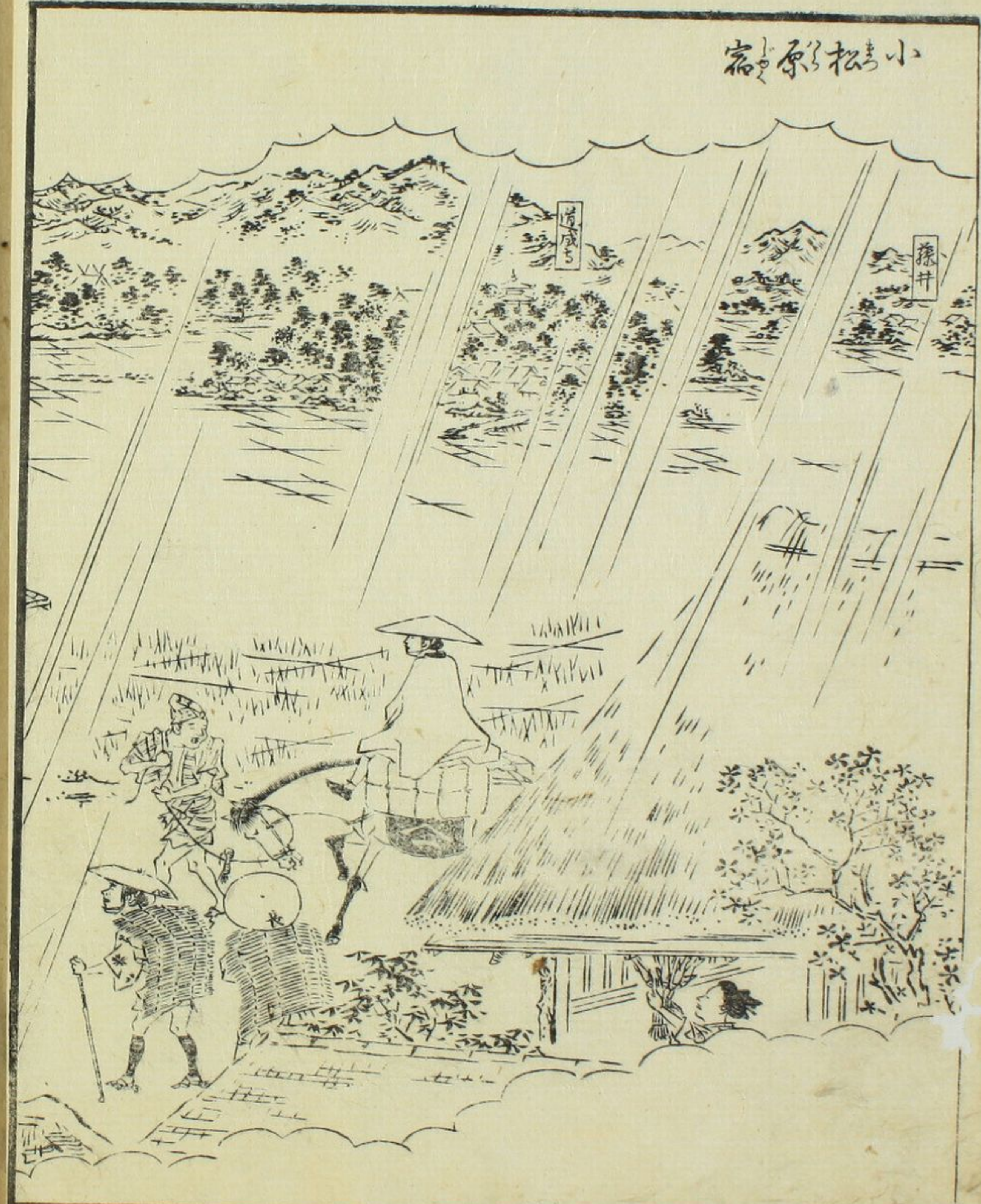


新千載集

















あもん地の  
 大森の江々  
 かしなとて  
 山田も教ん  
 かしなと  
 とう子そ  
 加納者平



湯川氏  
 古城跡  
 の圖

九ふ

九ふ

九ふ

九ふ



同日これを見し又中津河より又後志味利北小菊亭大納言の室と安藝入彦  
恭の女とむす於時々武田系國此方定信小て幸國陽川氏小とわげりぬり  
りりり永福年中小湯川安藝入彦宗義とつゝ人あれども信義とあふ人  
あり又純別武田系とつゝこれ小と要二那信忠等此名なくとも信大  
川氏此信小或は弘安此頃やあて久罪ありて延野湯川  
小遠流せしる原陽川村とて其頃延野小克賊して山中  
賊横行し一害をあた事志しつゝも延野定ま  
しるを以て官兵も捕らるる然もはるる然も小三郎  
福身重代の力を提て後小思ふて岩神作して遂小  
其儀を祈らるゝ其切小よるゝ勅勅を免され利年  
妻郡を賜ひぬ是よるゝ芳美の内梅とつゝ所小居住次  
芳美と年妻武田系小は信忠此子三郎此子某を幸即信幸と書せり其子を強き  
郎とつゝ武田系小は信忠此子勇力人小捕らるる南北此時  
然野八左司此一人あり軍功此賞小よるゝ左四目言  
二歌をも海せ願下幸國此族氏とありては山小城と

つゝ孫左郎よるゝ入妻系箕外とつゝ浮僧を請はるゝ  
鳳中寺を建川安藝村永正十九年小死す系正元年造  
小湯川中勢女捕らるゝ其子改去官内女捕らるゝ連致り  
醫して宗經を師友と居地此塚小嘉辰堂を建て  
連致れを改去せしとつゝ今此地此塚小拾れて或は嘉辰堂天文  
十六年小率次改去此子を連光とつゝ民部女捕らるゝ  
永福年中高山高政が前軍を帥めて之好実体と致し  
河内國致去る此陣小故死す連光の子を連美とつゝ  
連美武田勢小身を出家して子と中勢女捕らるゝ一父此勢と襲  
豊后志國幸國征伐の耐高後兼津系とつゝも連美を指  
少色を拒み其女婿玉置氏を味方小招らんと次玉置氏  
と次直春怒て其兵二百餘人を以て和佐此城玉置氏と圍て  
是を攻む玉置氏死して湯淺此白根氏石垣此神保氏と先



小室此意は家をち園小若くは妻又兵ををてを撰  
氏を撃つち園仙石権兵衛尾友久重つを然せ小を  
海津并小進むは妻備將を小松系小事めて戦を備は  
流将浮遊して決せさる内小系軍海津を掩して云  
くは妻活我の術を失ひ居城小火を掛市焚死此状と  
り一若夫泊れ城小乞に復純神の城小乞に入一が狼回  
云即左軍が名を命じ死を極むるに城小乞に死を山中小  
快くさぐーとて逆寄六郎が腹を保ひ仙石氏軍軍道  
参小達めんとは妻妻士卒を率て垣見作小出て是城  
沿ぐ山冷く管海一とくとも山跡小熟く保志大られは音  
れゆく解り黙れどくをて奮戦せ一は系軍死傷乃  
も此等をあらは逆小回此城小引退さ兵をかりて一  
濃城を圍む城之山本之指逃を出て下川小移り系軍是

を追ふ山本氏河治屋川を瀬し視橋を断ち湯川の軍  
兵と大少力を合せて是を流ぐ而陣おるもあつ一日條  
り系軍山谷崎嶇して逆退自由るるはる小若く逆小和  
睦志多逆子翌年大園此命小依て本願を安堵し其族  
三百人を率ゐ和別那山の城小春親次山本之指是小城  
ひ妻長小得せんとされども報月降さ次割七月十六日  
は妻を旅舎小毒殺し一は指を信守小殺さ其臣等路  
起りて殉死さるも此多一湊右系逆を殺して栗山  
三郎と九小強兵を率めて泊れ城を攻てち園より  
死此松若氏を斬て先君此意を對人として城を襲ふ  
ことども克むさる我死此小於て湯川氏滅せ  
る憐むべし然れども其族流率小及び各園小ありて  
或は士とありて或は農者とありて今小家名を傳り



其盛名ありし時麾下の士小与ふる所北感状乃類  
 又と神以て此寄附状多多く中不傳とるを以て條  
 威を致さる所不足とる今其中北花押を慕てとる  
 不出次

築為  
 皇月

直秀

湯川カハ虎司

太平記延元元年 湯川虎司此名及んたるを  
 湯川虎司と云ふは其考也

國大曆云

正平七年五月十一日及晚彼是云八幡官軍堅敗北歟

畧 熊野湯河庄司此間顯能卿專一官軍也而率二百騎

許勢降参奥州顯能卿陣を平記 南帝八幡御退去此條と云ふを我以此

以外湯川湯河庄司  
 和同書湯河庄司と云ふは其考也

然也湯川此庄司將軍方小ありて麻が瀬喜坂乃

後小陣を収て河瀬河入道宣佛が城を責めん

河瀬河入道山本判官田邊別當二子條騎中て押寄四角

八方へ進發し二百二十二人此首を収て田邊此宿母を

たすける畧湯川虎司が宿此亦小作者幸瀬此庄司と書て

まがこれ鴨記小ありしゆれ川毛勢小入て何の事もせし

周小云は致湯川を袖れ皮小比喩したるは又精進冥加



物須小抽此皮在司と云々一層も同ド幾多れと氏氏む  
 う〜とゆれういと〜と云々一先和此頃より〜も  
 ありよび〜流河を今と地名も成も畧〜てゆれば  
 と稱〜又此欵小より流鴨流と方言にて以て吸口又  
 上並分といふり同ド羊此上並小抽此皮を用ゐるれ  
 須小と云々〜たふ〜  
此の羊瀬と云々羊小はつ〜の傍む〜當於ふて〜麵穀小如味に  
 る〜代を今もカウトウとい〜は法園〜は遠ひ〜も畢交〜此  
 吸口上並加業る

志賀莊

若王子權現社

此社村のりり此處以下此標札のりり此を白井系といふ天保  
 十三年冬此標を以て社地此を以て者おもむき古墳  
 掘り〜又此標も同じ〜乃塚河〜小い〜と〜  
 故此中も亦塚小標〜然れども此處新建此標札あり當社を記述を  
 此社事小りり此上古此其人乃墓地なり  
 社を建て其墓を神と祀るるあり〜

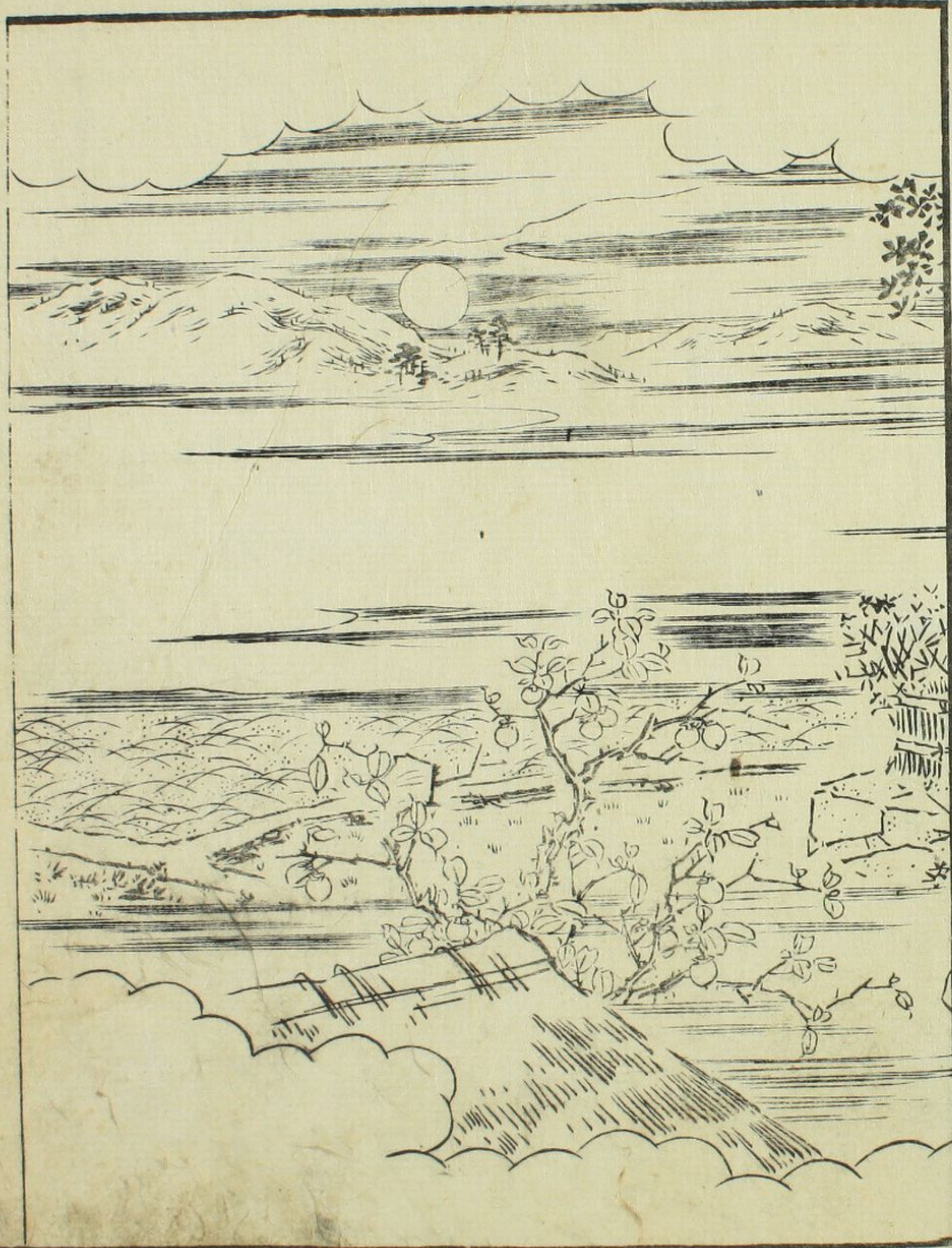
王子權現社

下志賀村の巖山根小りり此中みけ村  
 の有主神りり此一人社人三人あり

誕生院津安寺

當寺と徳率沙者をして冥祀と次行者父と因伏三妻  
 母と垣崎氏れ女ありと家系島山帝忠小出づといり  
 乃者寶曆八戊寅年六月廿二日を以て此地小生保知名之  
 之と〜〜聖年中秋に教満月小向ひて初て南を佛  
 中唱へ〜ば人〜は長ぶ〜小流ひて是佛つ小  
 像依〜天の四年同秋於村誕生寺小於て落髮〜  
 名を徳率と稱次念佛三昧を以て勤〜次是より白馬  
 山に藤小庵を築び教人念垣味を新ち置敷七度づ  
 子津川に流小垢籠〜佛名を唱〜事同課小大凡一  
 節通許〜七章小及〜礼髪是て肩を擡ひ肌膚  
 枯燥志〜去本れ如く世を雪山に於行〜か〜





くらわんざや  
 徳本坊者  
 二茶のとら  
 中秋の月  
 ふむまひて  
 初てなほ  
 を唱ふ  
 ころん











比井浦

松

こゝろ

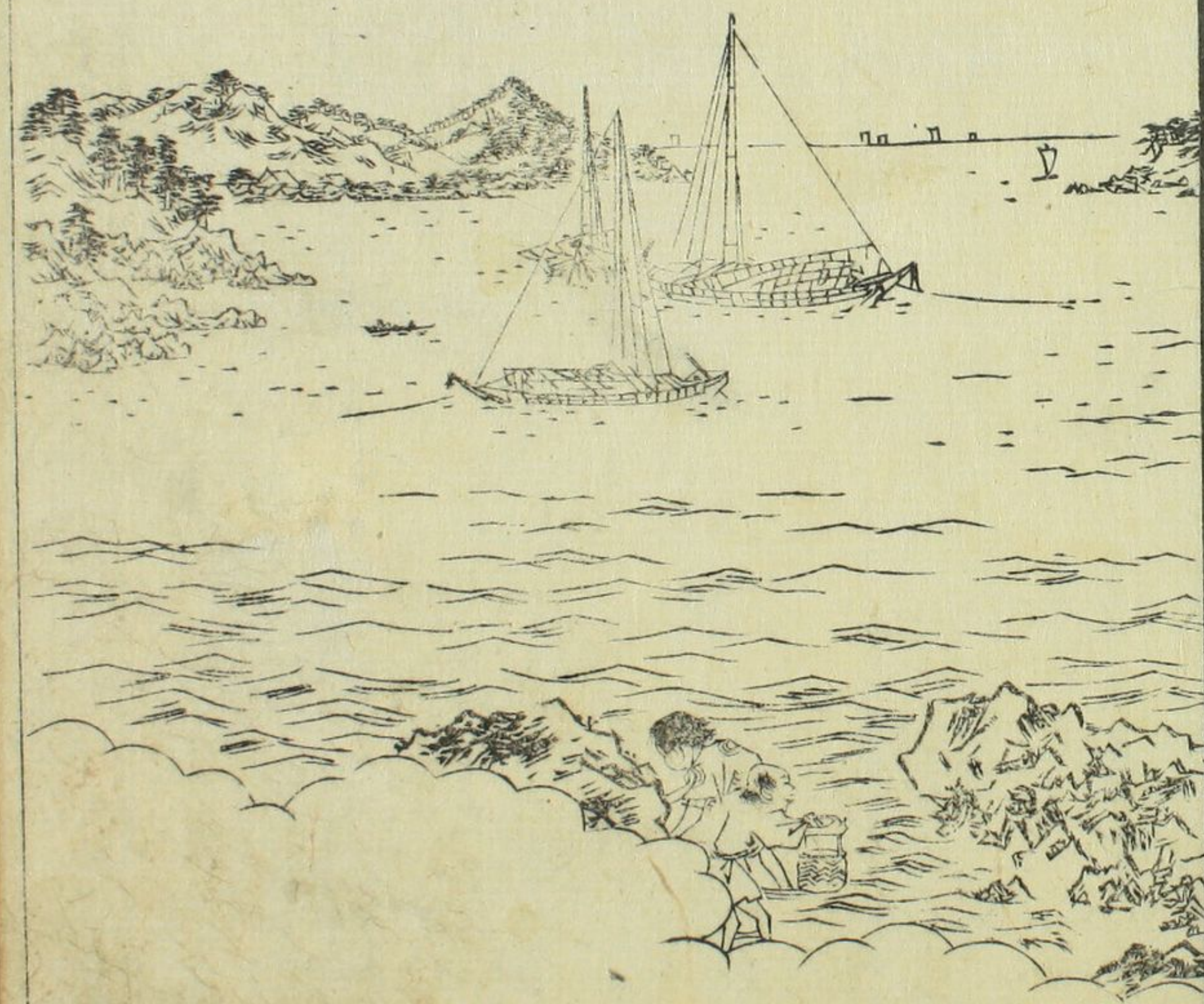
あはれ

子乃やと

あはれ

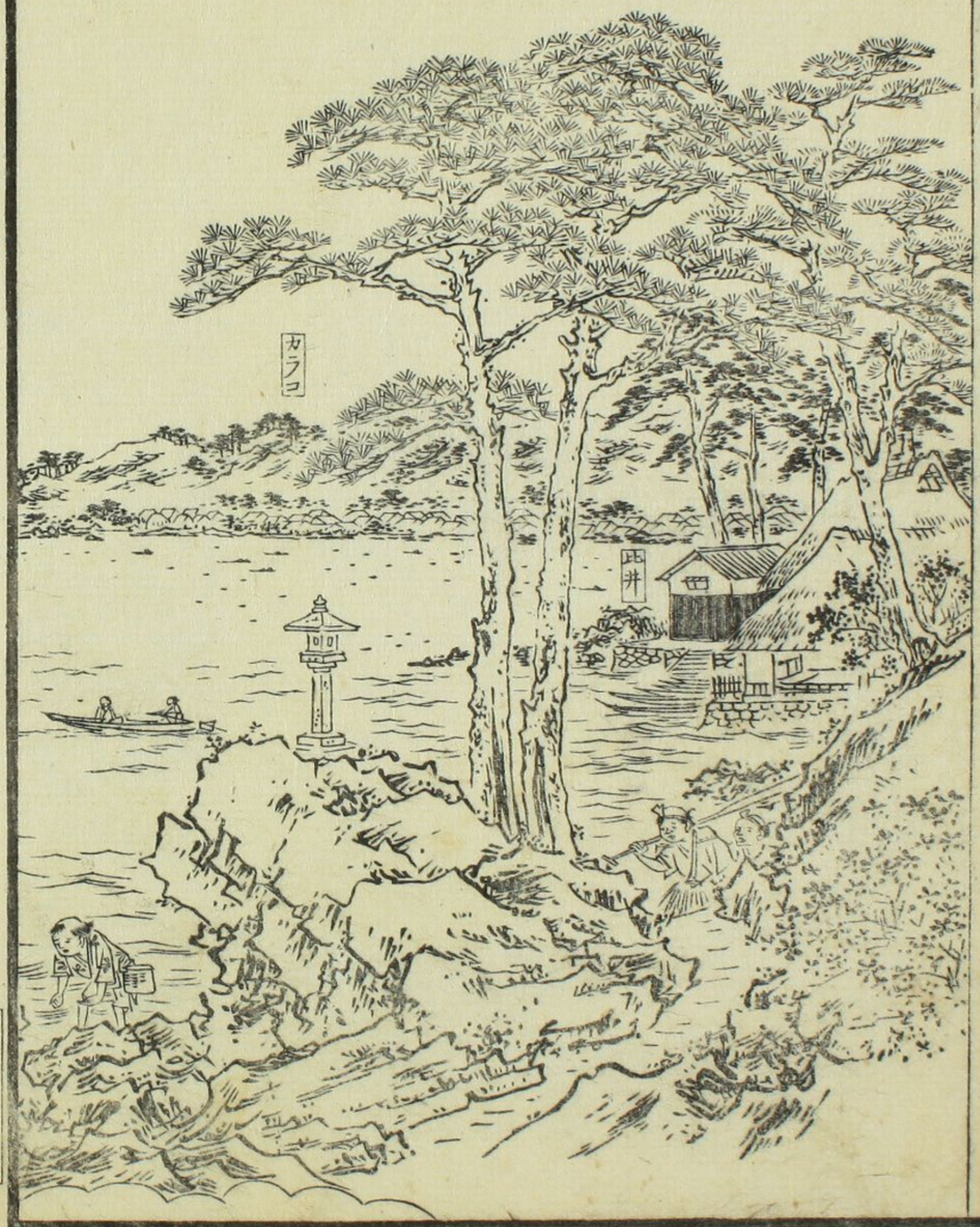
かき

大平



カラコ

比井



比井浦









けの帆の  
 うこかて  
 南亭  
 昨遊

紀真祖  
 一行寺  
 唐子



唐子浦  
 大將軍社

比井









産湯井  
榕樹

菅田天皇の御産湯  
 小用かといふ清水  
 のもとに根幹鐵ろ  
 めく枝葉扶疎として  
 立ち榕樹へ枝いふ  
 糸の如き嫩條を  
 たまごて奇状賞と  
 辱といふも散木  
 として世用に充てられ  
 俸に匠石の介と  
 免るゝを得





穀小丸く細小代て赤色を弄次口又尺よる長き者  
 と教丈小玉る其枝霖雨中小く水を地小挿小く根  
 を生次其幹大なる者と其中空竅小く質脆  
 く木々材とあり次とついで樹くせむ子園を才ホギタケ  
 とつ味美ありて妻あり此樹落摩めく方言アカウヤ  
 ついて海邊変く小産とつふ幸別小てを以て此海濱の  
 小浪とて其餘地別小産とつふをさうば劉恂が嶺表録  
 異小榕樹桂廣容南府郭之内多栽此樹如冬青秋冬不凋  
枝條既繁葉又蒙細  
而根鬚纏繞枝幹屈盤上生嫩條如藤垂下漸及地藤指入土  
根節成一大榕樹三五處有根者又橫枝者鄰樹則連理南人  
以為常不謂之瑞木とつひ品字箋小榕惟生閩中福州尤盛故號榕  
 城とつひ嶺南雜記小榕樹閩廣最多他省則無故紅梅驛以  
 北無榕とつひ以上小原氏  
筆記摘要先年近村の者漂流して福州  
 小玉とて小實小嶺南雜記小書ありとつひ此樹

火氣小福とつひ水出て薪とあり次又枚小あり  
 次諸小河もれと僅小和を和く小玉子此とありて其  
 化用や多しハ所傳散本ありれ小近と伐り控くもれ  
 多し

白鬚神社

河尾浦小あり河尾と泉湯と曰く櫻軒小

海光院德寺

日浦小あり寺去其宗西流あり寺傳小製材中今令藏寺と  
 宗一後寺を今此地小述次とつひ義如上人の南寺寺有附和寺傳より製材  
 尤子逃る村民等藏の岩穴小區次く教田ありて夜中これ小裁せ和寺浦へ  
 移れり

御系石

日浦北内回抗より日此神埼小玉る磯山巨巖あり  
 二尾材よりと坤此方坂乃二十

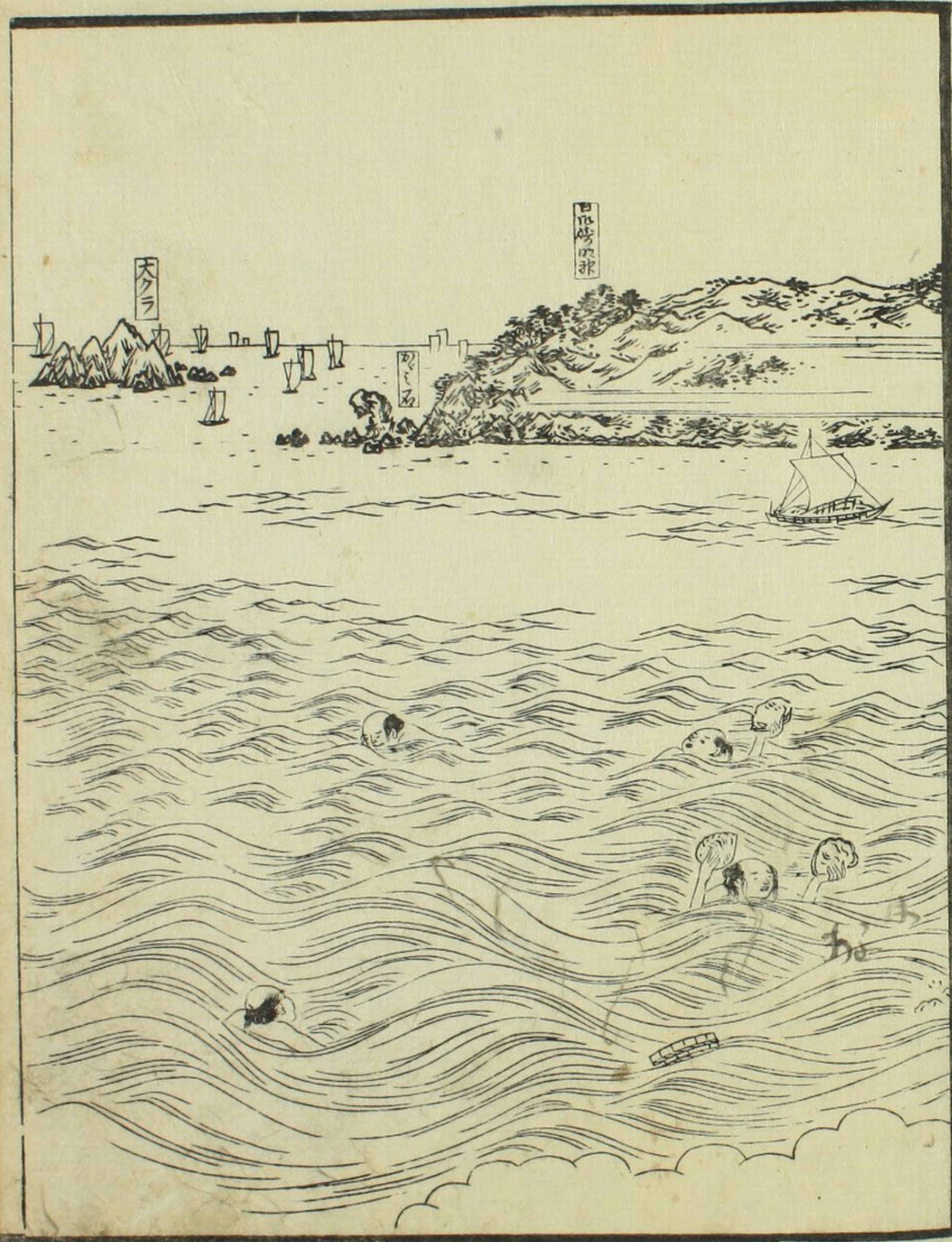
日御寄

此御寄をくも究も長懸れ波間小激湍志て西を石とて  
 乞らんとも子小似ると懸懸れ御寄去依の足指高崎

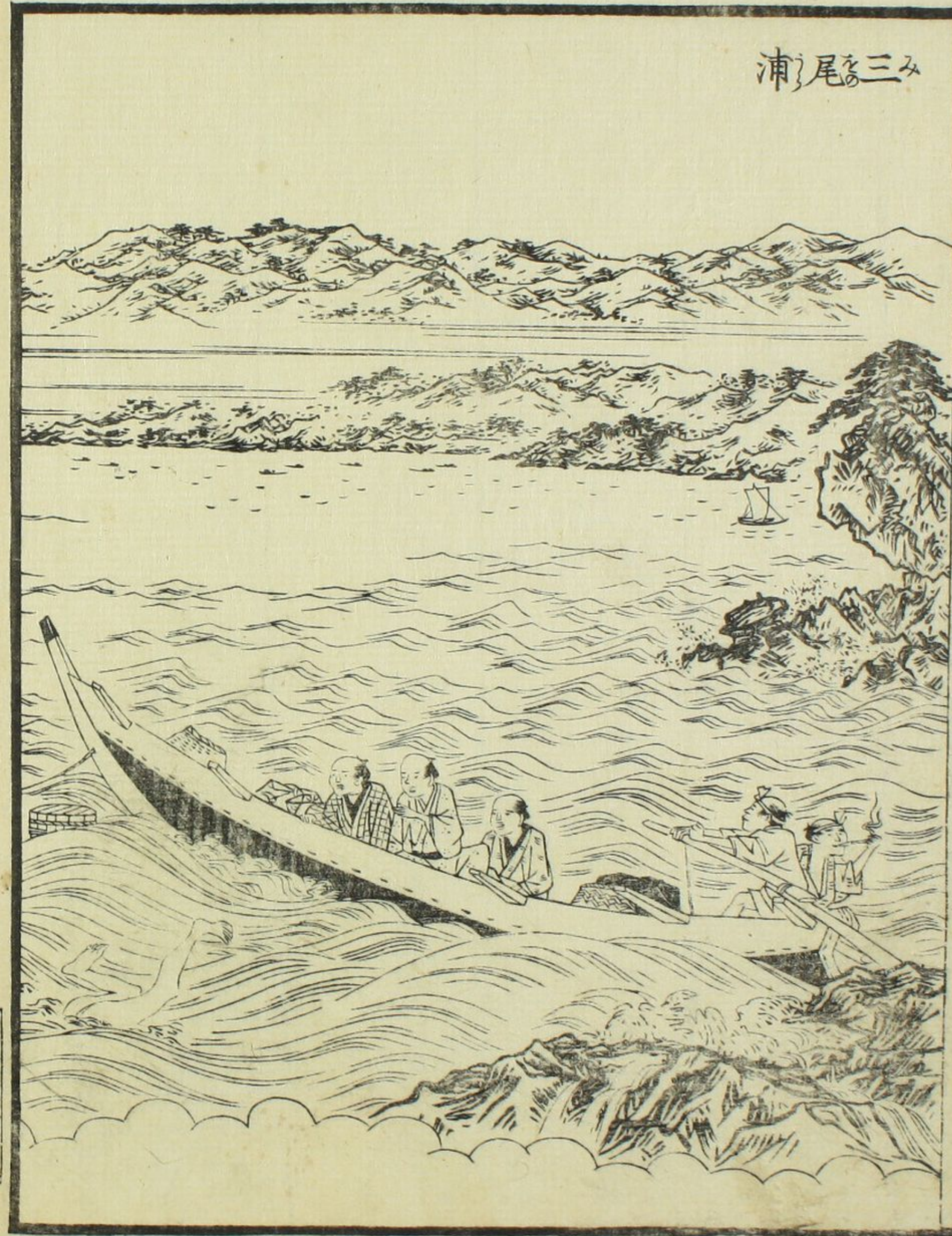
神宮

日浦より西小く出る磯山樹林翁翁とつひ寺下を神宮とつひ林功宮后  
 御系石よりと神上港の時詳を枚小究せらるれとつひ此名懸る中つひ入





浦尾三み





と海中小横つて二分鼎足此勢を介し九小風流流思  
此意なりは舟師等もこれを怪多しを甚しとて之を古  
者多量此乃幸小御艦を由良此漢小苗め港地も趣  
給ひしは此流れはくびを廻け給へるは居べし其眺を  
も此小流と河漢此流ふく漢ゆく此此去帆小連つたる流  
他等浦々右左此海流小遠り浮嶋の叢々致し濤の中小  
出没し市に濟の松此緑々長く雲雲を留る小似白良  
の濱此白砂の非時の雲々も又もて折寄る浪此意より  
も白

堤中納言物語云

かよと山と日此みさ紀と此流る小まら

接ぶる小河波小由幾治とつて小かよと此御流河をて海をてて日  
みさ紀小まらへり物をさる此又々電と火と熱へて我小没たる地名も  
たもへり  
あつては

御崎祠 此中みらり

かみ石 御崎小流へ流るなり人此後を名めたるがみ石一た小名はくくと  
つて又御殿敷ちみ石小狀を以て日此流るるを以てくくとつて

英保浦 今之尾浦と書次和田村よと山を越てふり行程一里漢家多し此浦  
の額を之尾うらとつて又海底小へく絶をそり漢家も多しなり

風早 日浦此海辺南此方小流るるゆれ震むるなり所をカガハイ又アミガハイ  
とつてカガハイを風子此者便多し又此屋浦此振屋山をもカガハイと

加麻幡夜能美保乃浦廻之白管仕見十方不怜無人念者

或云見者悲霜無人思丹

風早之三穗乃浦廻乎撈舟之船人動浪立良下

風莫乃濱之白浪徒於斯依久流見人無

按ぶる小風莫を古人うらとつてよみく本國此名所とつてよみて以て  
實文此頃小風莫といふ名をさるるゆりゆり年量於此戸崎の徳不  
知とつて入にちとつて人ありとつて通ふり此地の古名  
れどかりりど暴風小ても白浪起る事やれども多かみの奇  
き小流も浪風莫れ風早を驚かす時此風子のよりの  
浦をよめりち久未家子れ懐古此ころなり



久米若子  
三穗窟子  
箆子  
夕人圖

拙者  
吾子の  
事疎

今信院  
掛れども

万葉集  
久米のあまが

いづれかと  
よめれど

夫人の彌居  
さしれ



あまが  
法院の  
河津の  
あまが

素抄  
中日記

いづれかと

中つる勢

松ふりふり

くわたりは派

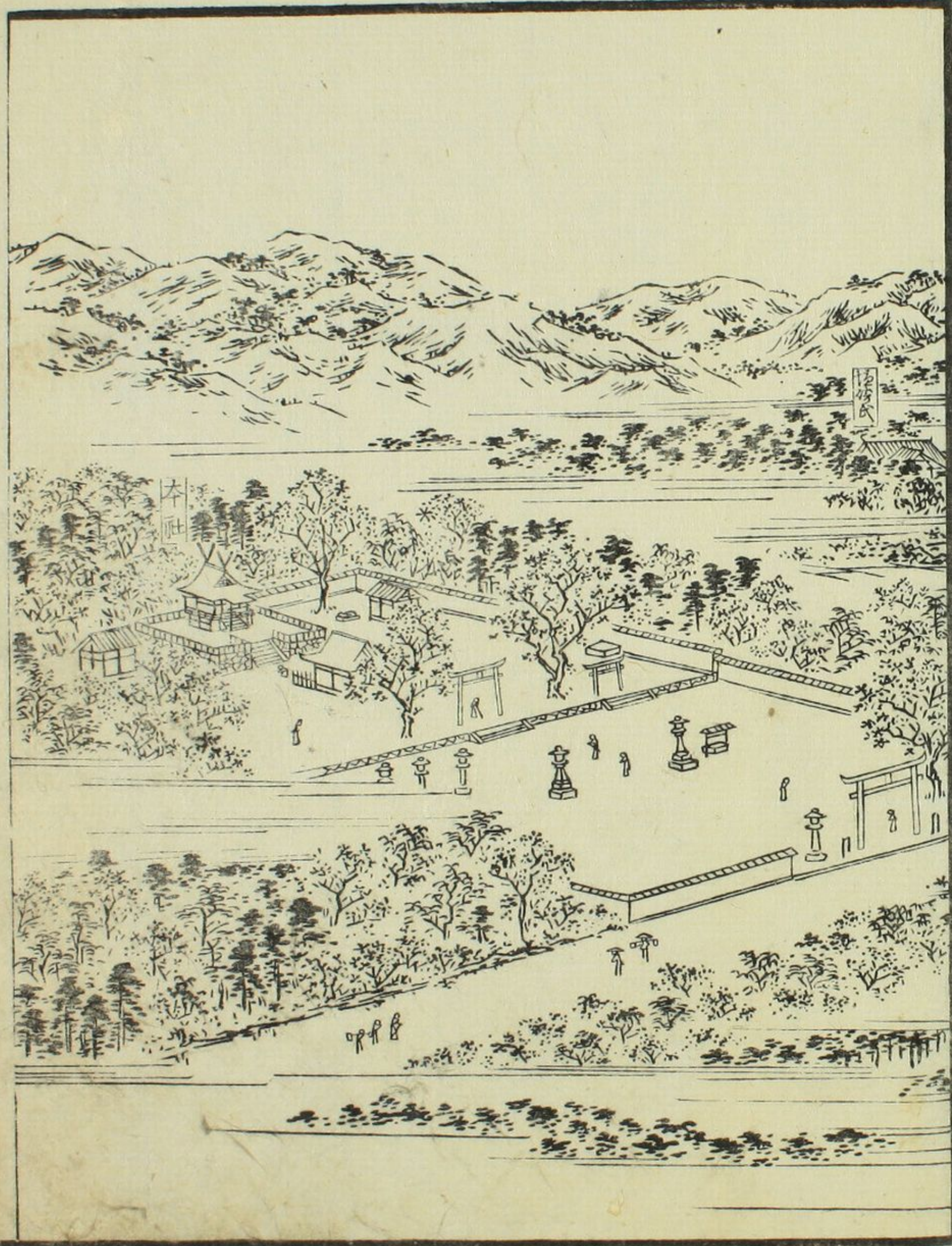
為顯











和田浦  
ひのくにの  
日御埼  
おんや  
神社



和田浦



一々御神子世して貞観年中官社小引一々  
 古々社殿壯麗小て日此御情をさるるも此を忌む常一社  
 田も若年一々一々一々後去るる廢地一々一々惜む一々一  
 社の傍子齋宮院とつらつら齋文と意事社るり一々一  
 つ此頃ふら富安の尾丸山村小遷一々一々境内意院芽此樹  
 林小て其大あるる之抱小も修と一々一々  
 雷明神社 此神社此村小て幸社の良入町小て雷除の守符と出  
 和回松原 和回浦此海邊より吾平田井原此瀬字此法村小渡とて  
 王子社 吾平浦小て此社を統統集とつら  
 若一王子社 小此村  
 二尾山 今此八山村此一々一々幸社二部  
 村此十年の歳なる文書た小我此  
 紀伊國小池莊半分幸社二尾山小分落居以取者不可道仍  
 之由好其其沙法也可令存知之旨此以下之状此件

紀伊國五九七

正平十年五月十二日

九中箱

塩崎小山一族名中

入山村の山下小此村も木給多由定此居城あり一々一々由定を  
 文禄十一年二月家奈浦小て之好氏と戦ひて功あり織田氏より日

豊后家小住一紀伊守と改むしつら  
 女郎墓 此址の西一町小八幡石塔一基此天正二年四月六日の  
 文字もよみて于地小のり次去人女郎墓とつら

財形 富安庄の西南小  
 財形 今廢して放牧村存せり建曆文書小を宝と書せり今文下條小載以續  
 財形 日幸紀大寶二年八月令記伊國河提版高年妻三郡款銀と見え一々一  
 根を鑿一も此若死あるより  
 財形の名り家り考一々一

王子社 財形村  
 寶永山清光院 日村小此寺淨土宗と  
 春日社 此村の小宮  
 善勝寺 同此善勝寺とつら浄土宗と宗此寺あり永禄六年建元此とつら  
 善勝寺 同此善勝寺とつら浄土宗と宗此寺あり永禄六年建元此とつら

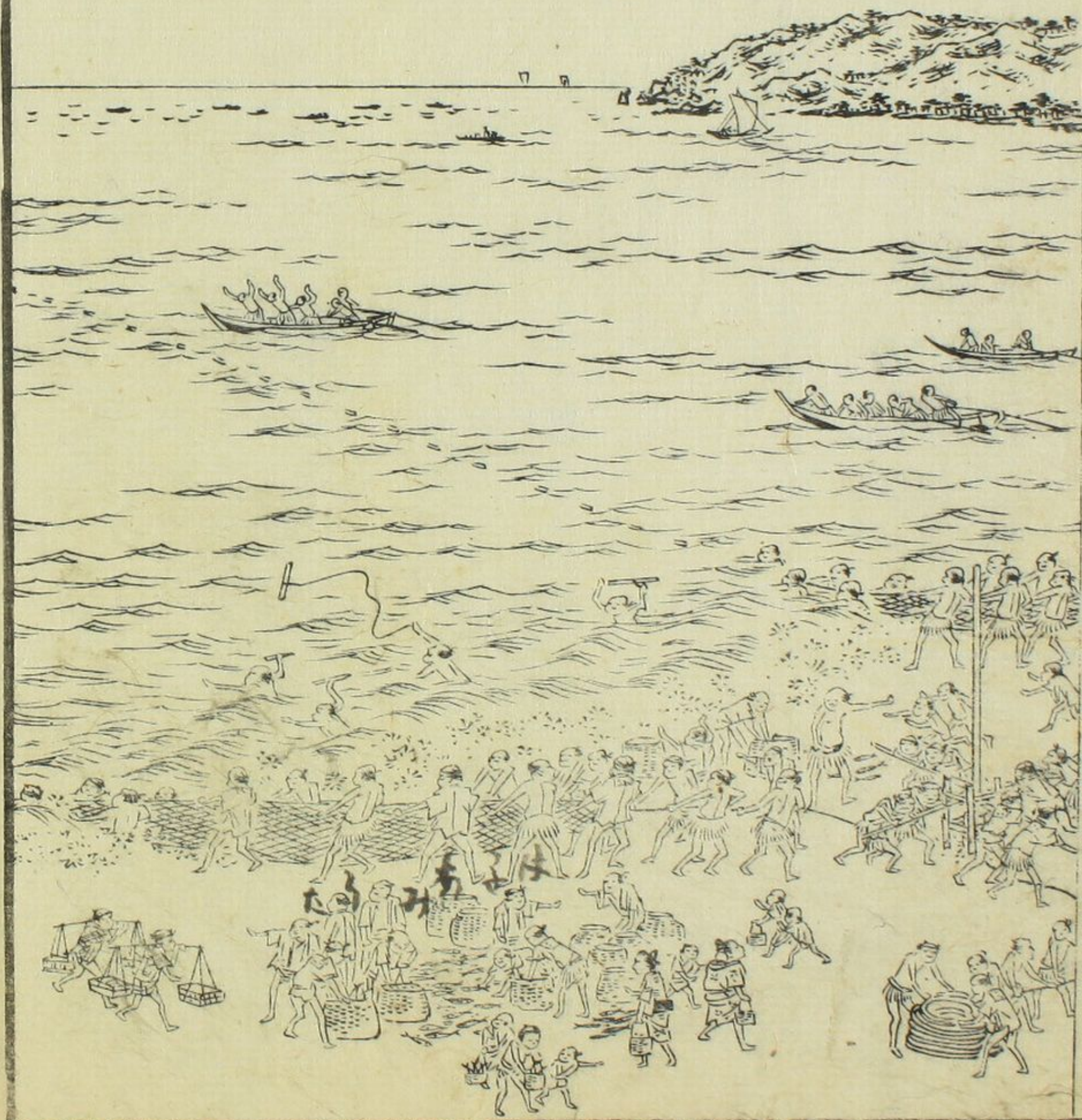
善勝寺 同此善勝寺とつら浄土宗と宗此寺あり永禄六年建元此とつら  
 善勝寺 同此善勝寺とつら浄土宗と宗此寺あり永禄六年建元此とつら  
 善勝寺 同此善勝寺とつら浄土宗と宗此寺あり永禄六年建元此とつら  
 善勝寺 同此善勝寺とつら浄土宗と宗此寺あり永禄六年建元此とつら



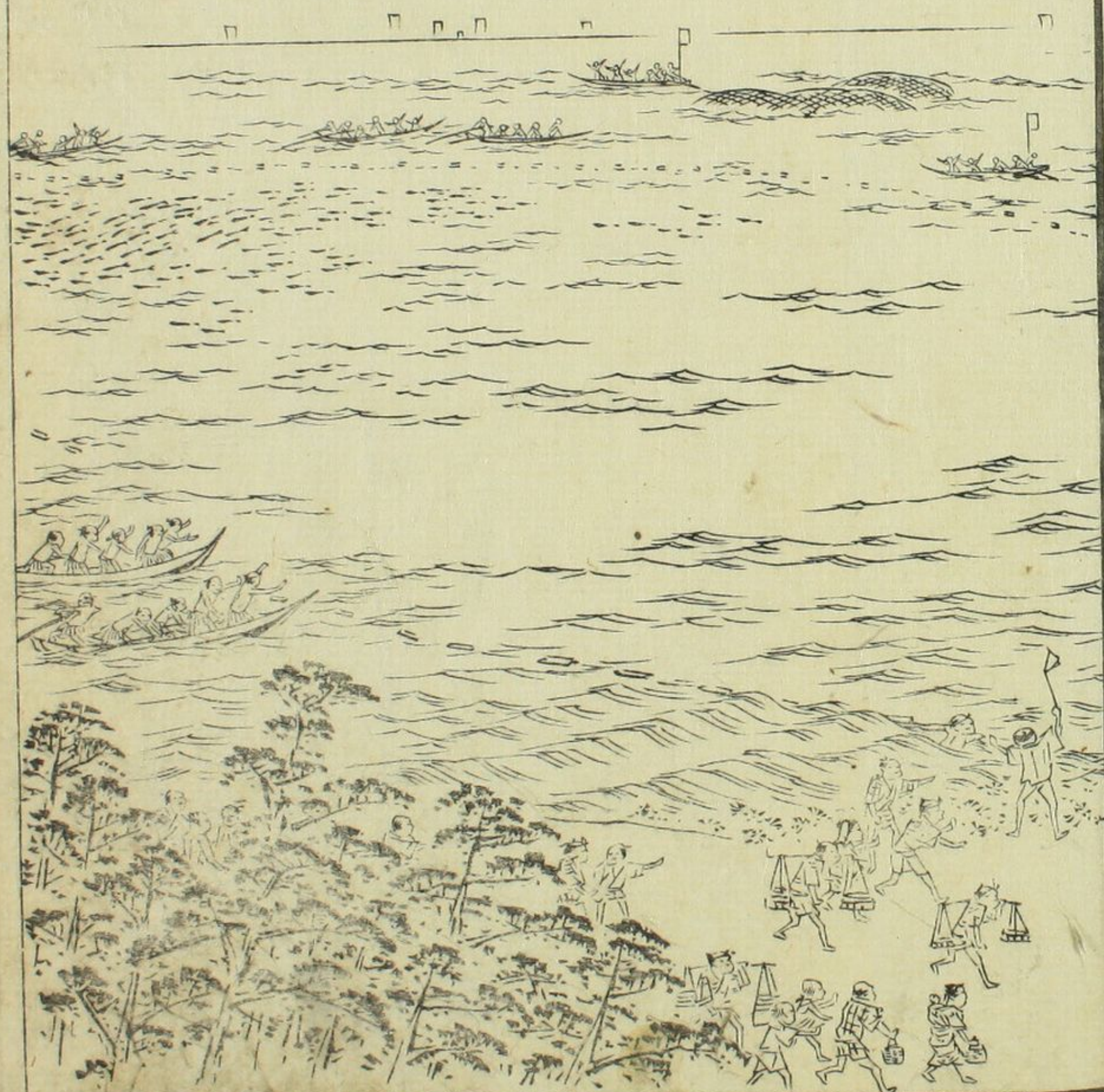
和田浦

敷島  
の図

大の浦ハ一も  
比并沖小面ハ  
去ク突出ス  
間一里ハあり  
の湾を有  
巨巖波の  
危小潜サ  
ミツトスル  
タレコロ  
ヨリト去  
ウケミ子万の



とらち厚張  
ウハの目  
ミツトスル  
ミツトスル  
ミツトスル  
大凡一日ハ  
子セタ  
多ク附ハ  
ミツトスル  
是と府下及大坂塔  
ミツトスル





蘭その莊なり 三ヶ村とて成  
於此の南小橋以

新官神庫文書  
呂使孫井近里

院廳下

紀伊國在庭官人等

可卑任

寄文英國司廳宣等為熊野新宮領

使者國使相共場四至打勝示令立券言上蘭室

卿壹處事

在管日高郡内

四至東限泉水際西限田井船津出井南限其田

兔石留島小限蒼柱九寸大際

使公文右籍官吏生紀康直

若去月

日 寄文稿謹控案内作所者地主永

有在傳所領也而有由緒所傳領也仍今以彼那所寄

進慈聖新宮領也彼那所當永命注文定佰玖拾  
斛内新宮陸拾斛稱宜給本宮貳拾斛三昧僧給那  
智拾貳斛社壇承仕等給如此可免置也於抄玖拾  
斛者一院御幸小松系御高火振料也此外可免除  
勅院事造内裏御願寺役夫工及大小國役等之由可  
被傳下也兼又於願家後者可相傳之由同  
欲被仰下乞請庭裁任叙快肯被裁下者將仰憲  
政之貴矣畧

建曆二年二月日

蘭八幡宮その 蘭村の社殿を以て  
神教を傳へし村の社殿を以て  
の中を以て神教を傳へし村の社殿を以て  
元和の頃 君とこれ神をえりてた多ひて御裁林の又と後寛政の



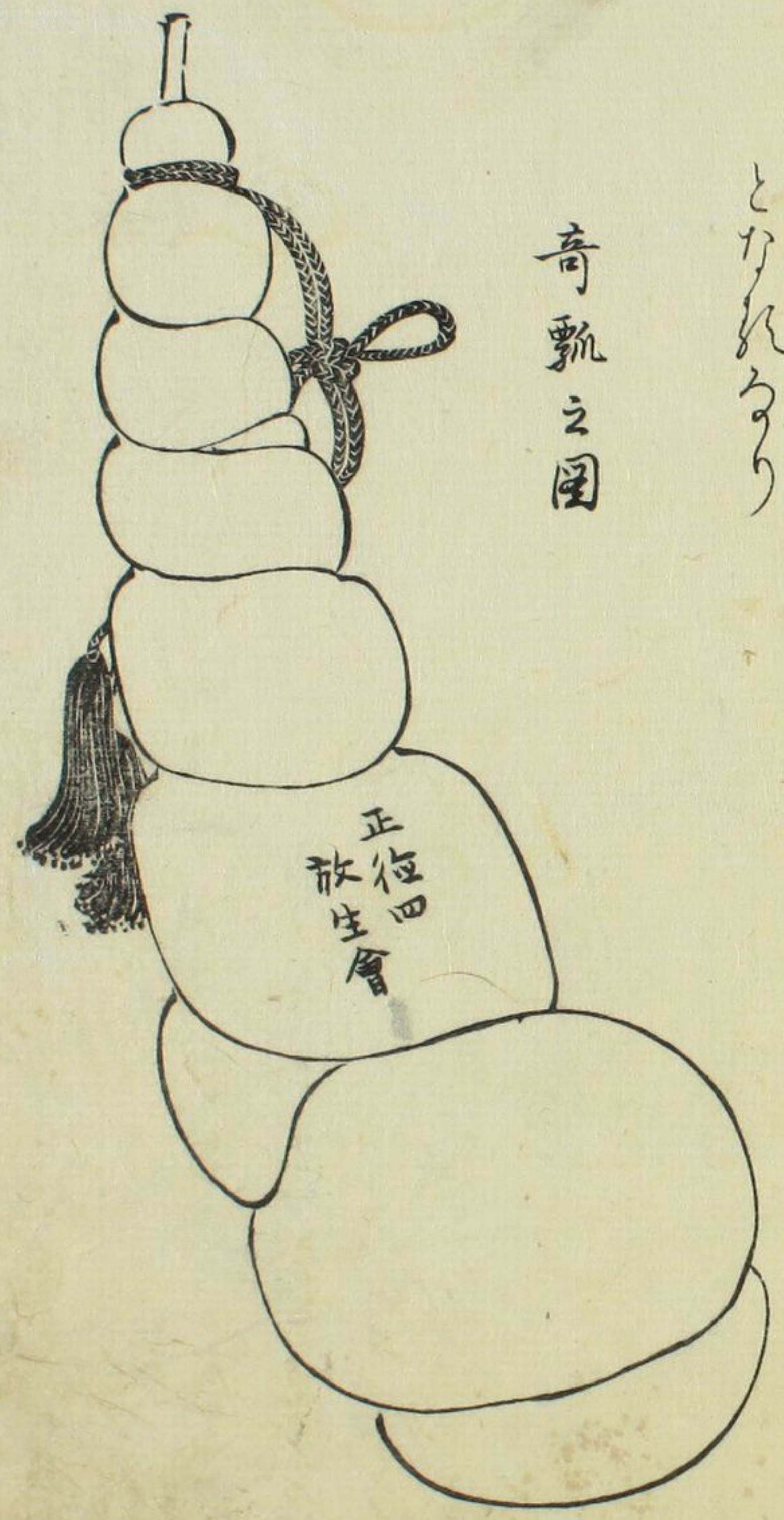
物小書村の者不効い一神書何やて恩状とて今も東日  
 先この文を清にゆくとて誦すもいといふも文不日  
 四恩状

夫人間小に恩あり四恩とて天地の恩父母の恩國王の恩  
 恩を重んずるたるもれは上の天賦したるて日月の光と依り  
 下を地小裁らしてみ穀菜果と食して一生とるもれは  
 勿論一日も天地の恩を忘るべからず次身軀を父母小受く  
 よつと重んずる恩のちちち種は苦勞とみ言ていづら  
 是漸く成長され事ある一日も父母の恩と忘るべからず  
 又これ微業小いもはさ父母と重んずる妻とととくみ胤は  
 多しはて代々安んずる事次とみる君上の所執りてゆえ  
 一日も小に恩を忘るべからず人生は内小とさめく乃  
 奉意わけて自力をうけて世とては計も法人の力  
 をかかして不足と補ひ急難とも救ふ事あるは元々の恩是  
 又忘るべからず小人のたの忠孝の二つとて重んずる  
 なるとゆえは恩のちちち小もとりつけ父母の恩國王の恩と

紀四編五ノ世上

忘れまじとて重んずるはこれ二恩をこころに父母より  
 孝行とあり國王は法令とよく守れおのびく天地  
 れたるも重んずる元生れとて重んずるは  
 とがれらるり

奇瓢之圖









奇童

安比領當村小童川作次といふ此は乃り子孫を希はれりて  
大なるを祈りて此を安比元年に夢みたり 若希へりて此日三年と夢み  
て之 夢中へりて此日四年と夢みたり 若希へりて此日三年と夢み  
時ありて 所當のりて此を祈りて此を祈りて此を祈りて

御坊

村中本願寺御坊のりて此を祈りて此を祈りて此を祈りて

寺傳云湯川氏少輔也先攝別河口にて之好長慶と歎ひて彼  
せし時本願寺治上人也先軍を助け騎馬二十人を副へ  
て小松原に城小陽ら志む也先其意を謝せんぬ小天文  
元年於中台系浦 小松原小系次今此  
松尾寺此地あり 小一字の堂と建之  
靈夢小よりて在田部尾寺此河弥流佛を安置し二男治  
部也攝法喜入乃被存を住僧として志宗を唱へ本願寺小池  
順せし上人自北有像一幅を獲りて是を貴次裏書り  
本願寺釋法如判釋形如武正之年乙亥二月九日書之證  
以上人高執紀別日田河部吉原坊舎常計物といひて今も  
存せりと後年也其台系浦上りて園浦の古き此内小遷

111

一 文祿四年依武保賀守 成りて此地小遷次といふ  
湯川也先草創此城を以て其肖像を畫りしめ今も  
るまて善提を訪ふといひて懇あり

南紀風雅集

自龍神還園村

釋法霖

迢遞關南萬疊山 溫泉浴去悠然還 仙源花落何由達  
虎岨雲深不可攀 今日得出連天之棧道 湍拔逆旅瘴  
嵐 顏園之村何遠 茅屋紫紆繞江灣 昏暮已投舅氏家  
總忘跋涉行路難 紀水濱吾舊廬 彷彿山林烟霧間 天  
若借一雙鶴 飛行不勞北轅 咨嗟殷勤謝主人 留吾縮  
得一生間 愛惜海南好風景 山可上居江可投 竿人說  
川源自龍神 川源繚繞幾林巒 還恨本在溫泉日 不以  
家書下急湍 悠哉勝遊何其已 探詩探興且忘餐 或時  
清宵步月立村橋 或時白晝穿雲扣禪關 况又高僧遇















○八幡宮 中山北より南に脚やとふ山とて八幡宮

○くろくま子 旧村北より南に或はふまの集り此寺に

○十日 畧次又愛徳山王子次久八王子次寄小松原御所云云

○清巻 古村の枝所あり道成

○道成寺 旧所より天台宗なり

本堂 表の十間半扉 奉尊千手観音 長一丈二尺寺内より昔氏に奉入

脇吉田光光善院 長一丈二尺寺内より昔氏に奉入

常念佛堂 十王堂 三重塔 樓門 今別カ

當寺代名天下小少とて然る處此院ありて所なり此を

寺傳小 文武天皇の勅願して此大石道成公奉りて

建立せられ名於小塔と出現せし千手千眼大菩薩善

院の聖場ありとていふ也 文武天皇勅願此寺を二年中此院乃

法中も及んたり然して此大石を成とていふ

人因史及公卿神記等も載せ次之の堂舎古々十六坊ありて

寺領も若干ありしは是れ此時中没収せられ去るに

年淺野氏此時より更し燈油料米を寄附せし奉堂

も屬修造を廢れども今に古瓦を傳へて屋上の鬼瓦等小

天授享祿此年跡を遺せし法華驗記今昔物語集

元亨秋書及當寺此縁起にも載る僧安次此傳大

同小異小志に後無人口小も後與るれば今畧記次延長六年

八月の頃矣則より是自より僧の然る處此寺あり

元亨秋書秘 年變記云此里清次屋司といふは家小若小

其娘 孝孫子女は名を清次といふ 此僧小也意し杖杖をかつて小

外野小至て迫て婦と相らんとい僧傳に云て意辭さとい

とも種々これに奉活れ禱願を遂て後手意小清といふ

傳に云てて歸途に此門を乞ふにぬぬけりといふて大

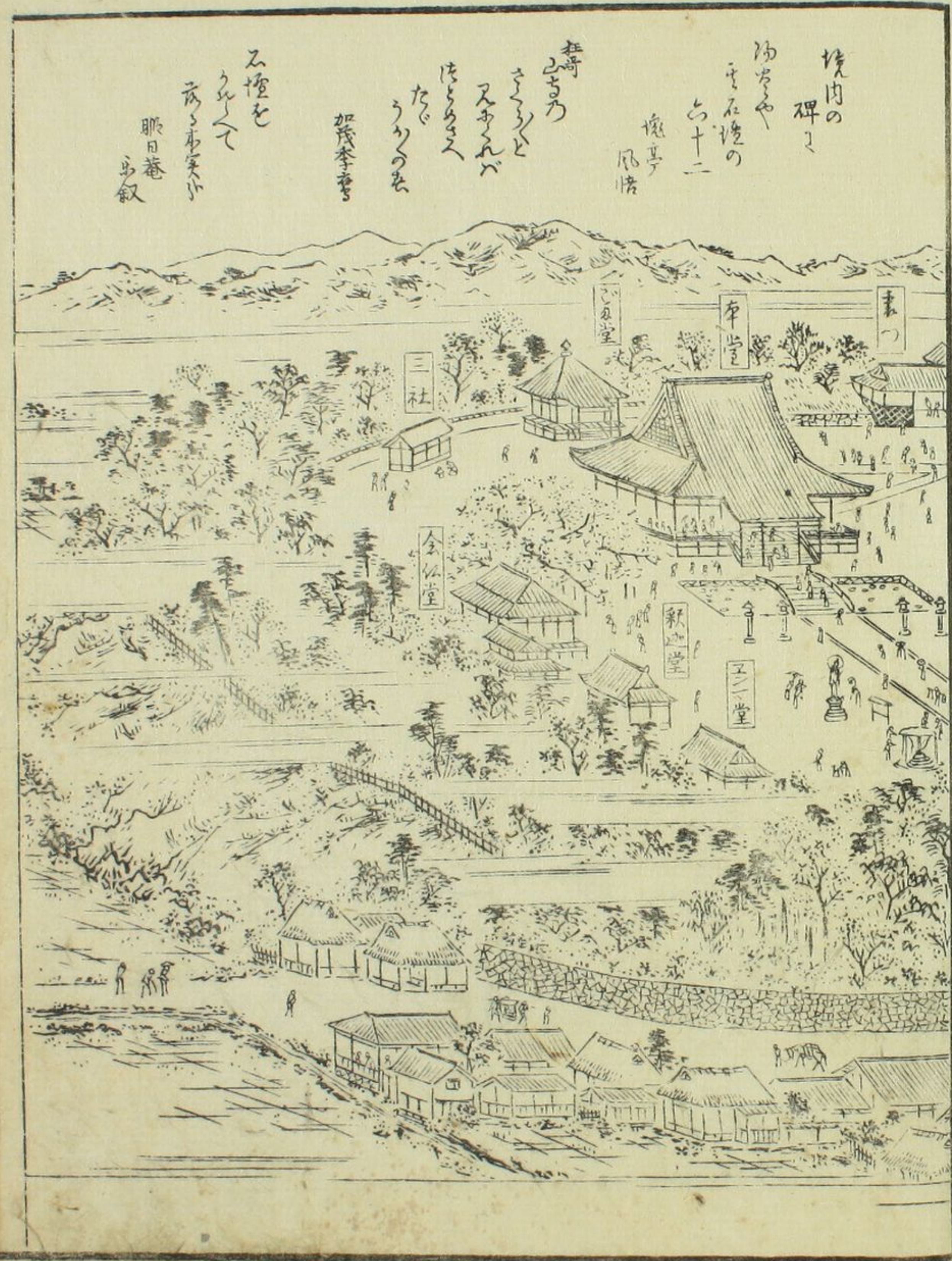


道成寺全図

去と北  
 大のり  
 三つとさや  
 みつと  
 心のま  
 たまけい  
 真祖



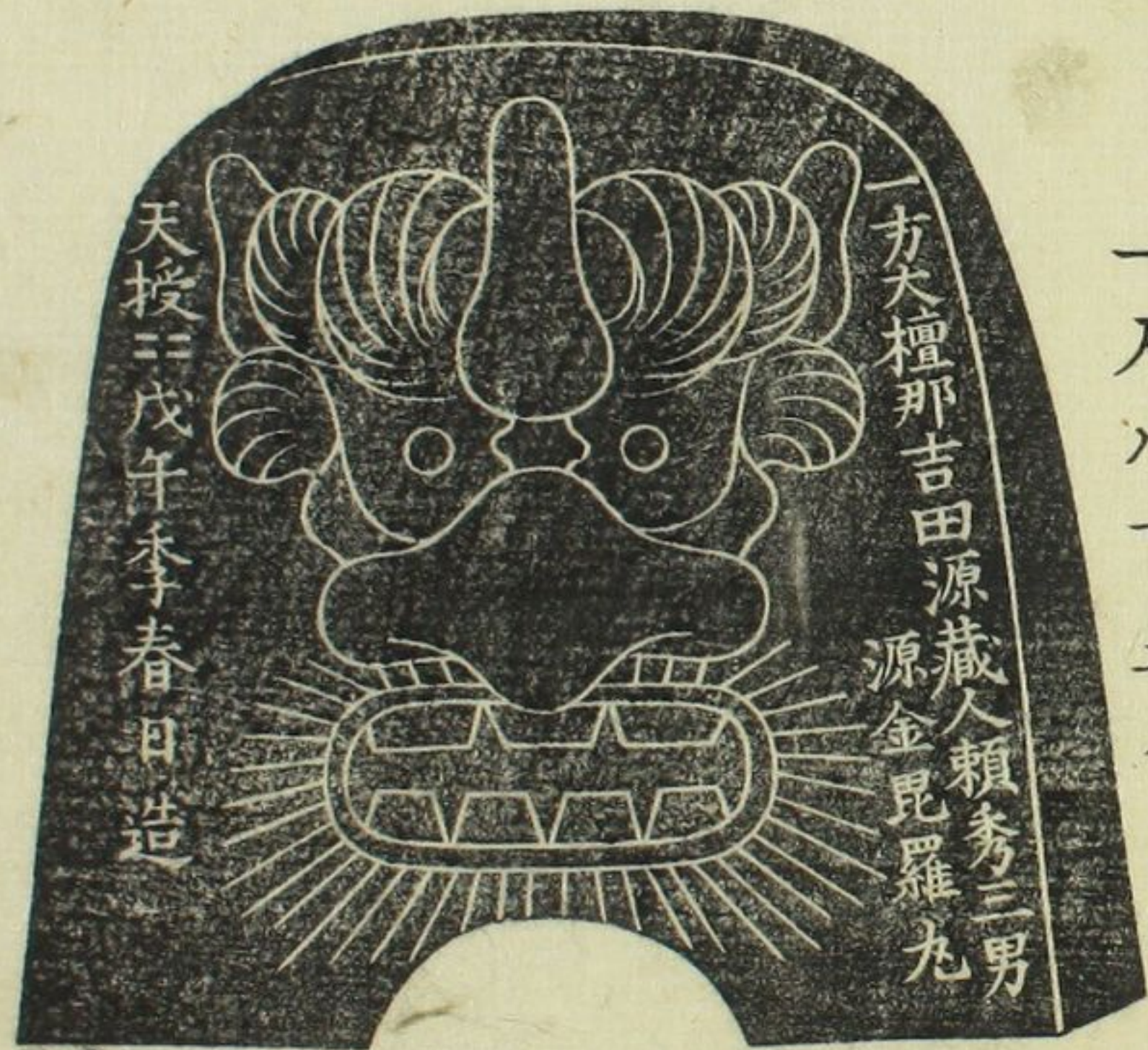
境内の  
 碑  
 湯  
 石の  
 六十二  
 楓亭  
 風情  
 寺  
 の  
 さ  
 さ  
 又  
 法  
 た  
 う  
 加  
 石  
 う  
 眠  
 日  
 巻  
 叙





道成寺古瓦

一尺四寸五分



一尺八寸五分

一尺八寸五分

天授三戊午季春日造

一方大檀那吉田源藏人頼秀三男  
源金毘羅丸

其二

蛇塚の図

蛇塚  
無物子  
それ  
うら  
うら  
うら  
うら





小怒<sup>こど</sup>了<sup>り</sup>和<sup>わ</sup>毒<sup>どく</sup>志<sup>し</sup>て家<sup>いへ</sup>を出<sup>で</sup>息<sup>いき</sup>大<sup>だい</sup>地<sup>ち</sup>と化<sup>か</sup>志<sup>し</sup>て逐<sup>おと</sup>来<sup>き</sup>れり僧<sup>そう</sup>當<sup>どう</sup>  
 ち小<sup>こ</sup>乞<sup>ぎ</sup>了<sup>り</sup>入<sup>い</sup>其<sup>その</sup>机<sup>き</sup>を告<sup>つ</sup>て救<sup>きう</sup>ひを求<sup>もと</sup>む乞<sup>ぎ</sup>徒<sup>た</sup>等<sup>ら</sup>大<sup>だい</sup>鐘<sup>かね</sup>を作<sup>つく</sup>  
 志<sup>し</sup>て僧<sup>そう</sup>を度<sup>あか</sup>ひに引<sup>ひ</sup>く堂<sup>どう</sup>を平<sup>ひら</sup>至<sup>いた</sup>るんどもか此<sup>こゝ</sup>妖<sup>まじ</sup>地<sup>ぢ</sup>尾<sup>び</sup>を  
 以<sup>も</sup>て戸<sup>かど</sup>をうら碎<sup>くだ</sup>り鐘<sup>かね</sup>を碎<sup>くだ</sup>ふ小<sup>こ</sup>火<sup>か</sup>燄<sup>えん</sup>ゆゑにけり此<sup>こゝ</sup>の  
 かへ志<sup>し</sup>てぬ乞<sup>ぎ</sup>徒<sup>た</sup>等<sup>ら</sup>を信<sup>しん</sup>じて中<sup>なか</sup>をえんる小<sup>こ</sup>僧<sup>そう</sup>を教<sup>くわ</sup>育<sup>く</sup>れり  
 疎<sup>そ</sup>れれり朝夕<sup>たふし</sup>のりて或<sup>ある</sup>老<sup>らう</sup>僧<sup>そう</sup>の愛<sup>あい</sup>小<sup>こ</sup>僧<sup>そう</sup>も妬<sup>ねた</sup>も二<sup>に</sup>地<sup>ぢ</sup>より  
 来<sup>き</sup>りて壽<sup>じゆ</sup>量<sup>りやう</sup>品<sup>ひん</sup>を寫<sup>し</sup>て苦<sup>く</sup>道<sup>だう</sup>を免<sup>めん</sup>じ志<sup>し</sup>めんるり誠<sup>まこと</sup>  
 乞<sup>ぎ</sup>ふ老<sup>らう</sup>僧<sup>そう</sup>を此<sup>こゝ</sup>願<sup>ねん</sup>の如<sup>ごと</sup>く小<sup>こ</sup>せしる僧<sup>そう</sup>を兜<sup>と</sup>率<sup>そつ</sup>天<sup>てん</sup>小<sup>こ</sup>生<sup>せい</sup>  
 是<sup>こゝ</sup>女<sup>に</sup>切<sup>き</sup>利<sup>り</sup>天<sup>てん</sup>小<sup>こ</sup>生<sup>せい</sup>れり又<sup>また</sup>愛<sup>あい</sup>小<sup>こ</sup>僧<sup>そう</sup>志<sup>し</sup>るる心<sup>こゝろ</sup>を  
 國<sup>くに</sup>樂<sup>がく</sup>伎<sup>ぎ</sup>を記<sup>し</sup>せし中<sup>なか</sup>小<sup>こ</sup>淨<sup>じやう</sup>庵<sup>あん</sup>此<sup>こゝ</sup>のつひに志<sup>し</sup>るる曲<sup>まが</sup>子<sup>こ</sup>他<sup>た</sup>に  
 中<sup>ちゆう</sup>城<sup>じやう</sup>縣<sup>けん</sup>姑<sup>こ</sup>場<sup>ばう</sup>村<sup>むら</sup>農<sup>のう</sup>家<sup>か</sup>陶<sup>たう</sup>姓<sup>せい</sup>有<sup>あ</sup>兒<sup>こゝろ</sup>名<sup>な</sup>松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じゆ</sup>五<sup>ご</sup>歳<sup>さい</sup>白<sup>はく</sup>晝<sup>しゆ</sup>端<sup>たん</sup>麗<sup>れい</sup>至<sup>いた</sup>  
 首<sup>しゆ</sup>里<sup>り</sup>從<sup>じゆ</sup>師<sup>し</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>行<sup>い</sup>至<sup>いた</sup>浦<sup>うら</sup>漆<sup>し</sup>山<sup>さん</sup>徑<sup>けい</sup>中<sup>ちゆう</sup>向<sup>むか</sup>昏<sup>こん</sup>黑<sup>くわい</sup>持<sup>ぢ</sup>一<sup>いつ</sup>竹<sup>ちやく</sup>竿<sup>さん</sup>點<sup>てん</sup>地<sup>ぢ</sup>行<sup>い</sup>見<sup>み</sup>  
 燈<sup>とう</sup>求<sup>もと</sup>宿<sup>しゆく</sup>乃<sup>の</sup>十一<sup>じゆ</sup>獵<sup>りやく</sup>家<sup>か</sup>父<sup>ふ</sup>出<sup>で</sup>夜<sup>や</sup>獵<sup>りやく</sup>止<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>女<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じゆ</sup>六<sup>ろく</sup>頗<sup>た</sup>妖<sup>まじ</sup>麗<sup>れい</sup>留<sup>りゆう</sup>宿<sup>しゆく</sup>挑<sup>てう</sup>  
 松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>拂<sup>ひ</sup>衣<sup>い</sup>起<sup>た</sup>女<sup>に</sup>羞<sup>はづ</sup>且<sup>かつ</sup>怒<sup>いか</sup>持<sup>ぢ</sup>獵<sup>りやく</sup>具<sup>ぐ</sup>欲<sup>ほつ</sup>殺<sup>ころ</sup>松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>走<sup>そう</sup>女<sup>に</sup>逐<sup>おと</sup>之<sup>を</sup>山<sup>さん</sup>曲<sup>まが</sup>  
 百<sup>ひやく</sup>方<sup>ばう</sup>壽<sup>じゆ</sup>寺<sup>じ</sup>主<sup>しゆ</sup>持<sup>ぢ</sup>僧<sup>そう</sup>普<sup>ふ</sup>德<sup>とく</sup>頗<sup>た</sup>有<sup>あ</sup>行<sup>い</sup>松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>奔<sup>ほん</sup>入<sup>い</sup>乞<sup>ぎ</sup>救<sup>きう</sup>四<sup>し</sup>顧<sup>こ</sup>無<sup>な</sup>隱<sup>いん</sup>處<sup>ちよ</sup>僧<sup>そう</sup>

伏<sup>ふ</sup>之<sup>を</sup>大<sup>だい</sup>鐘<sup>かね</sup>内<sup>うち</sup>令<sup>し</sup>三<sup>さん</sup>徒<sup>た</sup>守<sup>しゆ</sup>鐘<sup>かね</sup>旁<sup>はう</sup>女<sup>に</sup>至<sup>いた</sup>三<sup>さん</sup>僧<sup>そう</sup>戲<sup>ぎ</sup>罵<sup>のの</sup>逐<sup>おと</sup>之<sup>を</sup>女<sup>に</sup>不<sup>な</sup>得<sup>え</sup>松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>  
 御<sup>ご</sup>天<sup>てん</sup>如<sup>ごと</sup>癩<sup>らい</sup>出<sup>で</sup>門<sup>かど</sup>本<sup>ほん</sup>僧<sup>そう</sup>啓<sup>けい</sup>鐘<sup>かね</sup>有<sup>あ</sup>聲<sup>こゑ</sup>女<sup>に</sup>還<sup>かへ</sup>奔<sup>ほん</sup>入<sup>い</sup>方<sup>かた</sup>欲<sup>ほつ</sup>為<sup>な</sup>惡<sup>あく</sup>忽<sup>たち</sup>披<sup>ひ</sup>髮<sup>はつ</sup>改<sup>かへ</sup>  
 形<sup>かたち</sup>入<sup>い</sup>鐘<sup>かね</sup>内<sup>うち</sup>普<sup>ふ</sup>德<sup>とく</sup>與<sup>よ</sup>諸<sup>しよ</sup>僧<sup>そう</sup>繞<sup>にやう</sup>鐘<sup>かね</sup>咒<sup>じゆ</sup>之<sup>を</sup>女<sup>に</sup>自<sup>みづか</sup>鐘<sup>かね</sup>倒<sup>たふ</sup>垂<sup>た</sup>首<sup>くび</sup>出<sup>で</sup>見<sup>み</sup>鬼<sup>おに</sup>面<sup>めん</sup>手<sup>て</sup>  
 一<sup>いつ</sup>又<sup>また</sup>下<sup>した</sup>擊<sup>つ</sup>諸<sup>しよ</sup>僧<sup>そう</sup>咒<sup>じゆ</sup>不<sup>な</sup>已<sup>ま</sup>寺<sup>じ</sup>外<sup>ぐわい</sup>大<sup>だい</sup>雷<sup>らい</sup>電<sup>でん</sup>女<sup>に</sup>化<sup>か</sup>魔<sup>ま</sup>走<sup>そう</sup>出<sup>で</sup>不<sup>な</sup>知<sup>し</sup>所<sup>ところ</sup>在<sup>あ</sup>  
 是<sup>こゝ</sup>百<sup>ひやく</sup>年<sup>ねん</sup>前<sup>ぜん</sup>國<sup>くに</sup>中<sup>ちゆう</sup>事<sup>じ</sup>云<sup>い</sup>

道成寺縁起繪詞二卷

小足  
北足

書<sup>か</sup>後<sup>のち</sup>小<sup>こ</sup>松<sup>しょう</sup>院<sup>いん</sup>の宿<sup>しゆく</sup>御<sup>ご</sup>法<sup>ぽう</sup>と云<sup>い</sup>依<sup>よ</sup>先<sup>せん</sup>與<sup>よ</sup>此<sup>こゝ</sup>年<sup>ねん</sup>と云<sup>い</sup>修<sup>しゆ</sup>入<sup>い</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>に因<sup>よ</sup>古<sup>こ</sup>時<sup>とき</sup>小<sup>こ</sup>一<sup>いつ</sup>て後<sup>のち</sup>亦<sup>また</sup>中<sup>ちゆう</sup>古<sup>こ</sup>此<sup>こゝ</sup>を志<sup>し</sup>依<sup>よ</sup>

足利義昭自筆



右<sup>みぎ</sup>小<sup>こ</sup>御<sup>ご</sup>判<sup>はん</sup>別<sup>べつ</sup>者<sup>もの</sup> 所<sup>ところ</sup>出<sup>で</sup>る  
 天<sup>てん</sup>正<sup>しやう</sup>九<sup>く</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じゆ</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>日<sup>にち</sup>堂<sup>どう</sup>皇<sup>かう</sup>興<sup>かう</sup>國<sup>くに</sup>寺<sup>じ</sup>縁<sup>えん</sup>起<sup>き</sup>







其二

七八町 延ねぬ

七八町と

云々

わ

十二三町

云々



あし先達若水房より

我より男くし法師

かきこ牛箱のり

居て迎くる

若き信りし

老信也

つれていりし程のひらぬ

さねの人いし





三其

女房の水鏡

白

あふく

あふく

いまのけ法師の

うら

人



えいすく





其四



女房若

新も水鏡久

ぬき

われ

を七折

新文登

あゝあ

あゝあ  
 新も水鏡久  
 ぬき  
 われ  
 を七折



わあゝ口惜やいら

けは師と評

涙ハ

心ハ

あゝあ

物候

何に

恥ぢるに色

あゝあ

あゝあ

あゝあ



其五

人若わひきくらんよ

えはうし

さい

まきもろくろ

まきもろくろ

まきもろくろ



乃しそいらく

かぬぬおふく

しん



うくたふか

しん



まねんわ

はき

めくさ

色

くまろやし

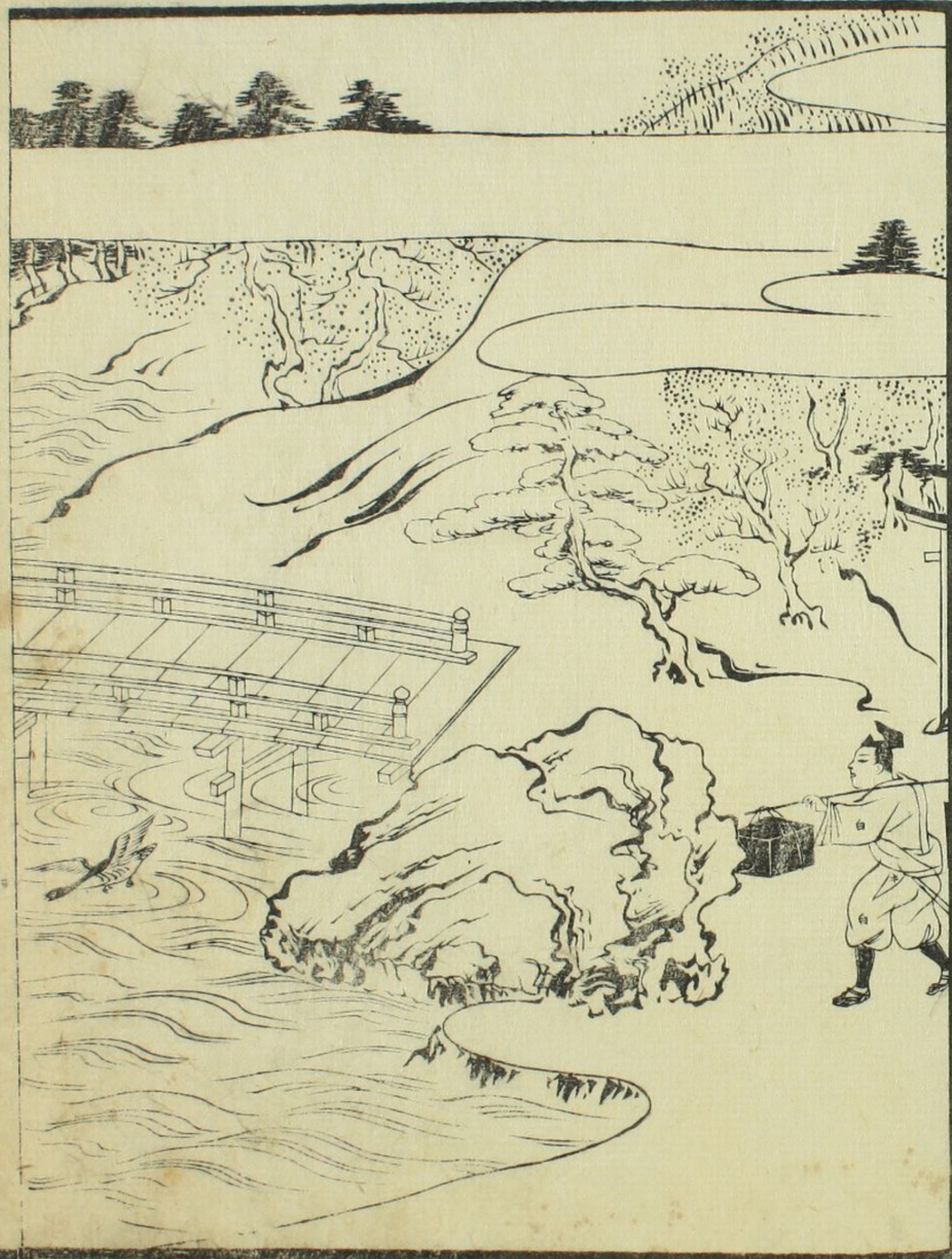
きまろやし



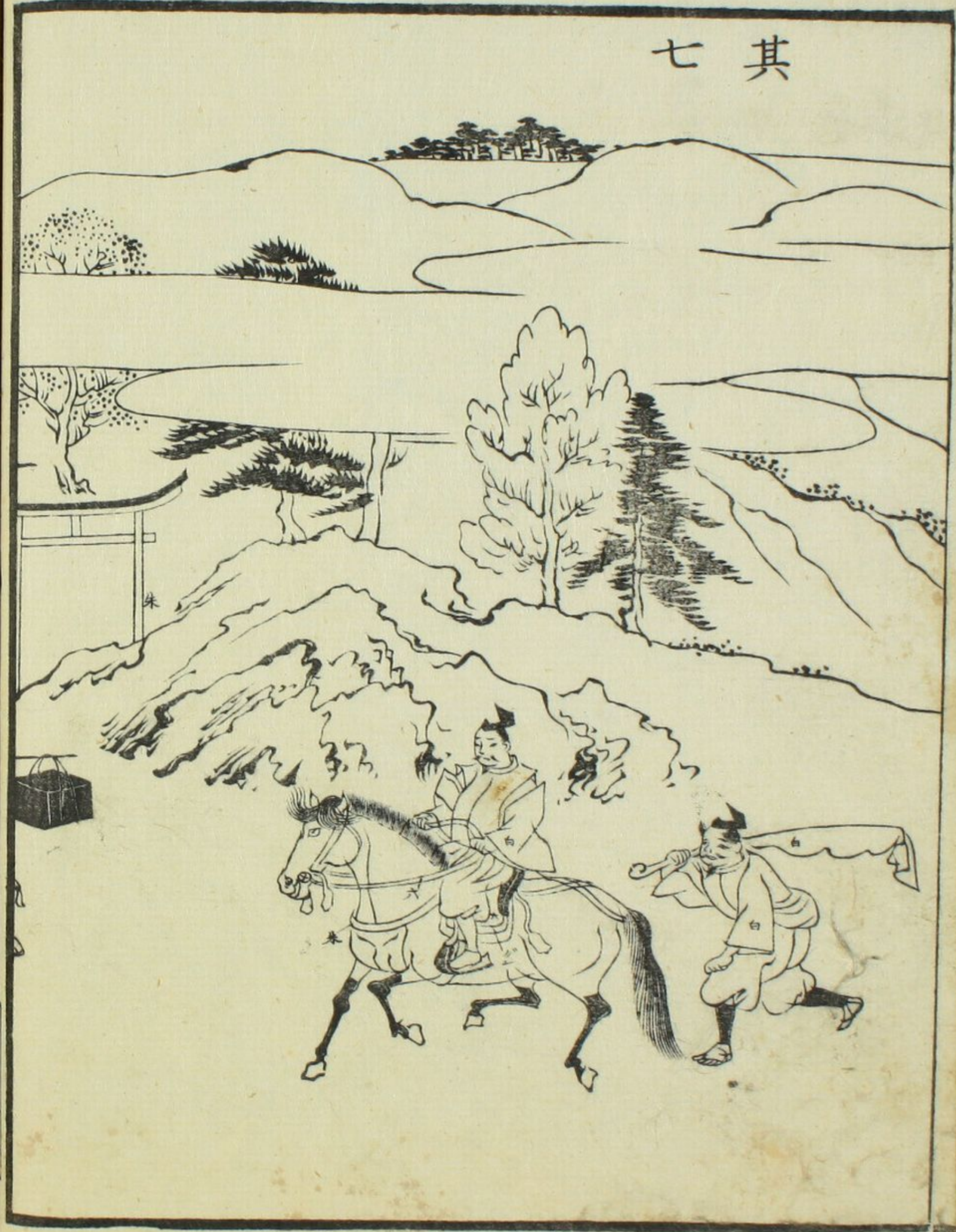








其七









所産者此縁記有也... 不轉之為日本... 彼也... 永行...

古蹟

安政此寺... 四年一掃... 移して...

聞鐘聲智慧長菩提生煩腦輕離地獄出火杭願成佛度衆生天長地久御願圓滿聖明齋日月獻筭等乾坤八方歌有道之君四海樂無為之化紀伊州日高郡矢田莊文武天皇勅願道成寺治鑄鐘勸進比丘瑞光別當法眼定秀檀那源万壽丸并吉田源頼秀

合力諸檀男女大工山田道願小工大夫守長正平十四年

己亥三月十一日

櫻大樹

堂此傍小... 大樹... 小堂...

家集

雪れ中... 令細

安珍塚

傍此傍小... 安政... 似雲

清姫塚

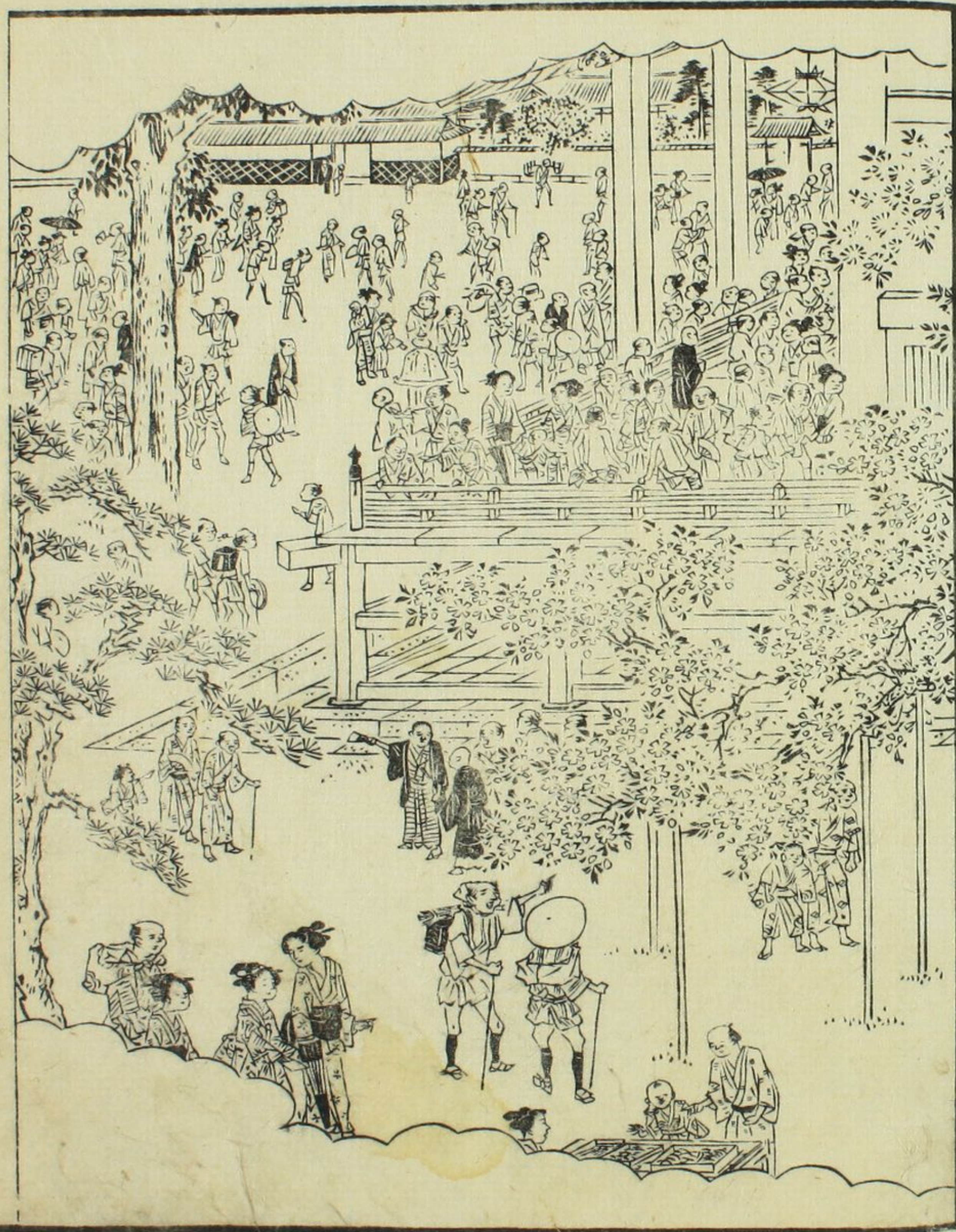
傍此傍小... 一丁...

別里

刑罰賊沙弥乞食以現得頓患死報縁弟卅三

紀連吉... て因果を信せ... 給ひ其致小至...





櫻大樹

山櫻半是替  
 僧房嬌態十  
 分惹與長不  
 識西洋春色  
 美佛心定有  
 感東方  
 右道成寺  
 賞花  
 水寺忠明









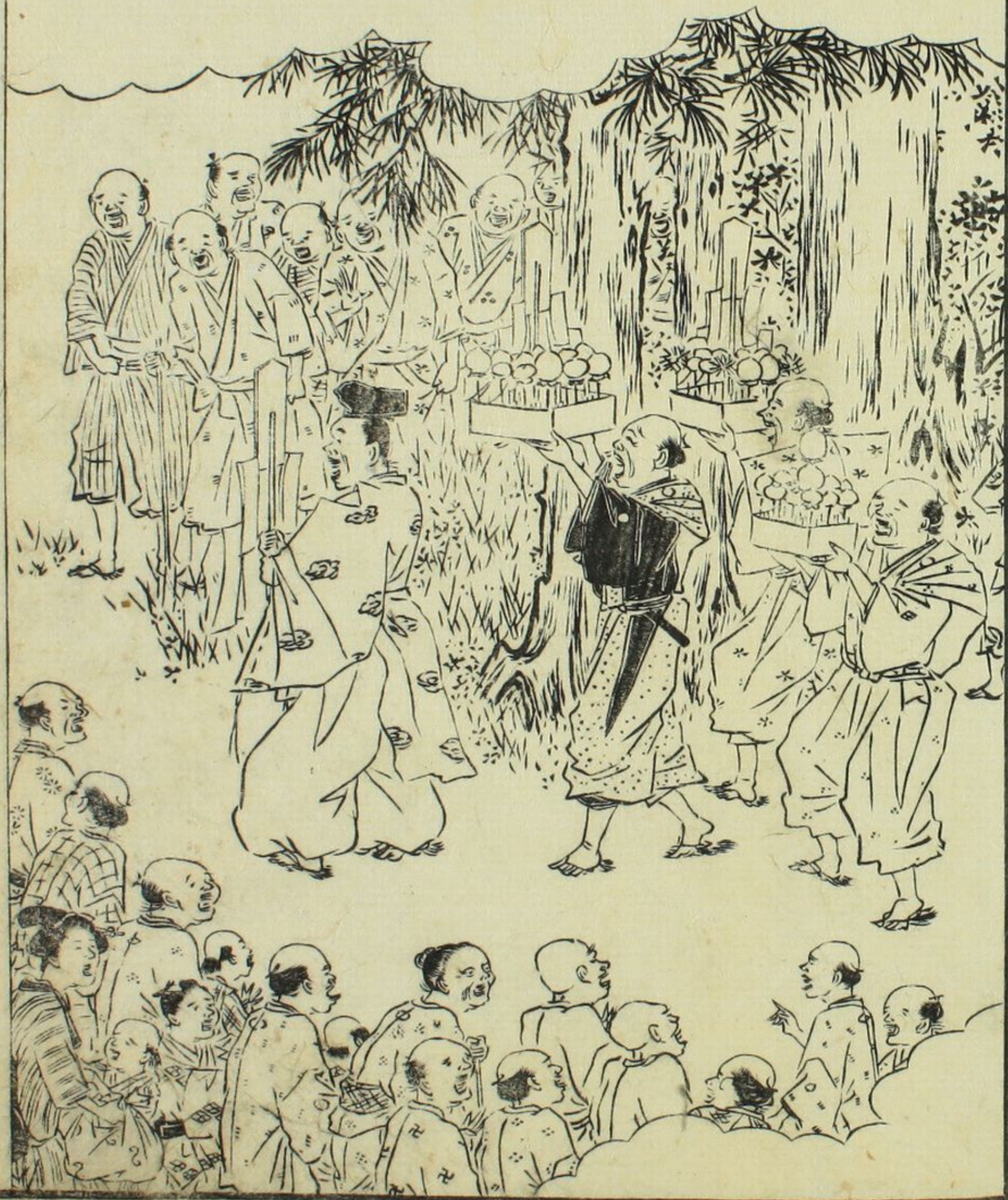








丹生先生の祭の富











妻山  
 ヤマノ  
 あまの  
 ひら  
 つみの  
 りま  
 瀬見善水

和佐山

妻山

妻山

妻山



大山権現社前  
 下りて日高川を  
 流るる真妻山と  
 名をいふ

妻山

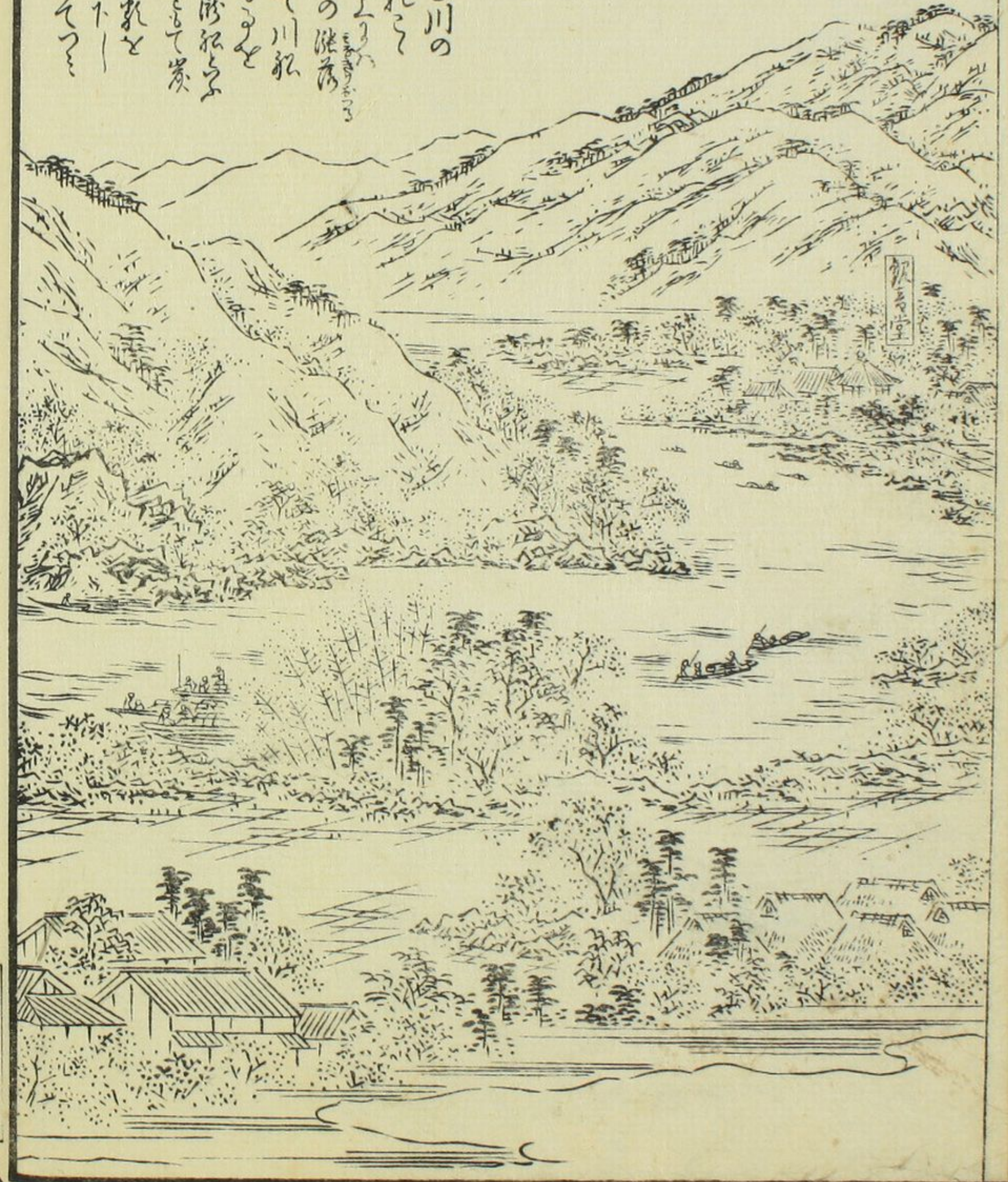
江川村

大山権現



舟の津

田子川の  
みかんこ  
よりよりの  
大所の津  
りりて川  
のちりり  
えんげん  
小ねとて  
船のれと  
はま  
こま



うさよと  
ね多の  
川ね日  
つと  
か  
て  
お





災害消滅れぬに絶ゆる神  
をくく 井之系 頼のり

雄山

藏王権現社 平川村より電をり二十町坪の山と  
傳云 迹御古村小瀬戸賀右馬といふにあり其遠祖吉野

れ藏王権現を伝へて老年まで系絶無くさざりし十延長  
八年神殿小色敷せし多中ノ神況も傳ひて撰むれ系  
治を感へし今も汝り里邊き山小ゆきて供を交へ  
しとて遂に以て天浮流ひしうぐうぐ堂舎を系創  
勢しといふは 念記よりして追子天台祖これ 登治の山治ハ  
楢根大相左各子列植次祠前もこれゆきて言を交へり  
本社よりて花つとこれ 秘蔵小屯海堂を建て其流と次は  
地よりとく 薪符とてとて古徳庵所と唱へ申別よりして結とる  
もれし 拾い山在田日高れ二郡小隣りて田舎れ系又いふ  
けり 在田れ其の山よりして於賀殿中を北よりしてけり

地十津川の略しと東に市なり西に郡中北村高山と乃  
をそこらに流しを流しに日高川の河原に紫曲として田園  
とせしと海口小をり日津崎表奥南新崎を帆敷小流  
らぬに河波流流しとてこれ髪をひきとてくはやく高妻  
か嶽切目畝と東南に雲小隣りたる例多二月晦日六月十八日  
を藏王屯藏二王乃縁日なれは高那の男女系系していと

賑

産物蕎麥

山登村に川所号此山鳥多く蕎麥を植て有下小出は味より  
系此村を此世の候也小海して時よりふる蕎麥ををりしや

洞滝

大洗川村の川流し  
あり 非流なり

観音寺

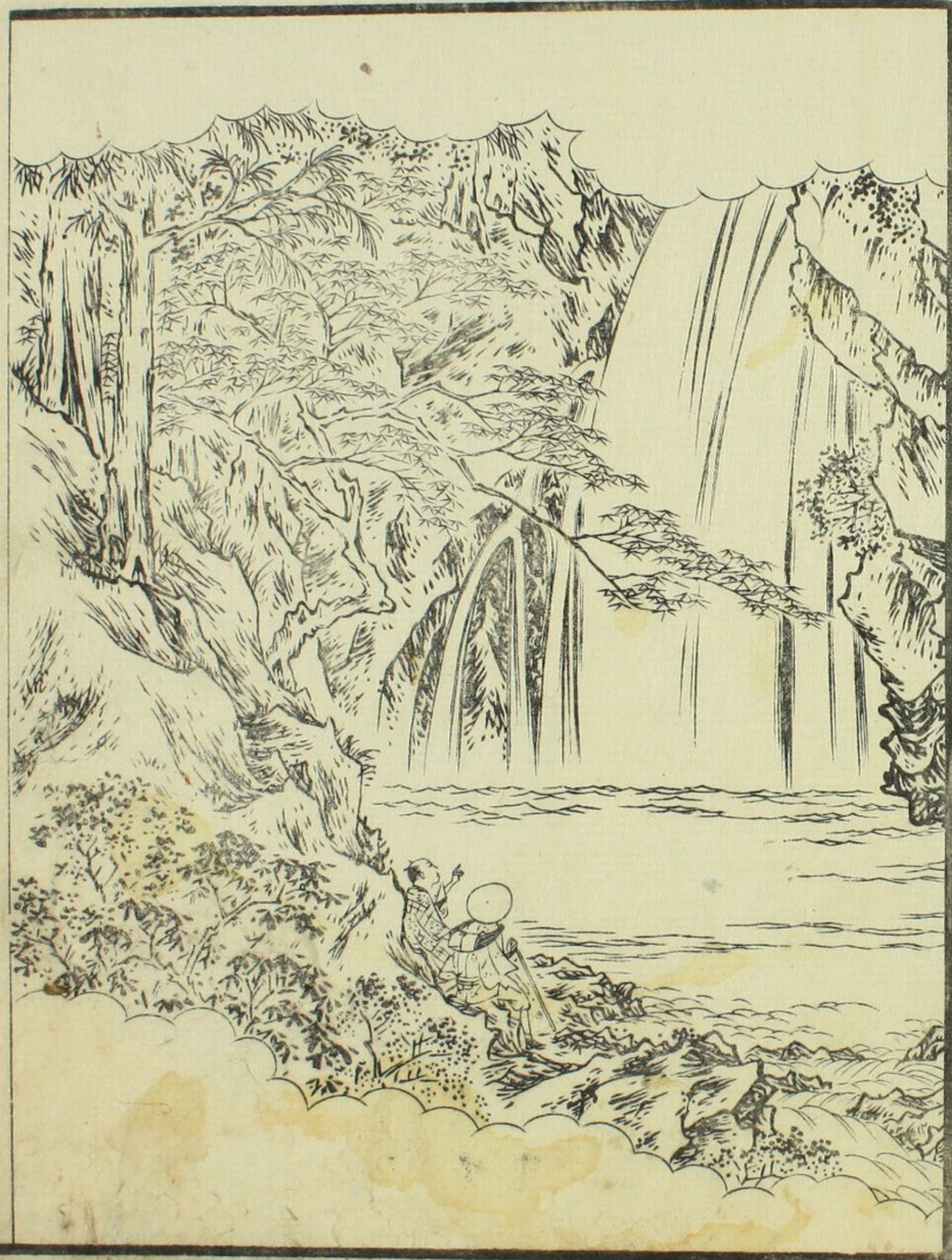
山登村より  
古宗法西流

紅津

紅津ハ惣名小ては村小分れ赤を流の上といふ  
それより川口まで田舎ふる赤のをいふあり

日高川れり瀬紅津を折つ瀬とてあれより舟楫れ用哉  
色次下つ瀬を河心よりく流くまで川尻まで日毎に下り





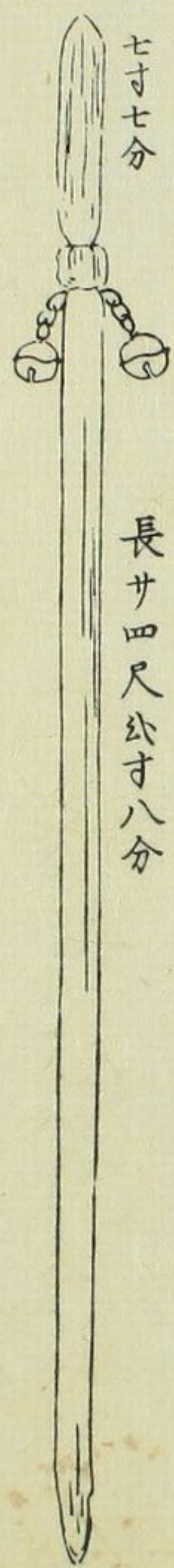


芳澤あゆみ



あやめらる當那  
小原長庵村の農夫吉助や  
つゝ者の子に初年より大坂に在り  
後俳優を以て名を三都に轟かす其技  
且小長物惣頭と稱す父吉助其職業あるを怒りて勤當に  
享保年中病て死或書曰大坂の人と云ふ誤なり今其圖を以て婦女子の消茶に傳ふ

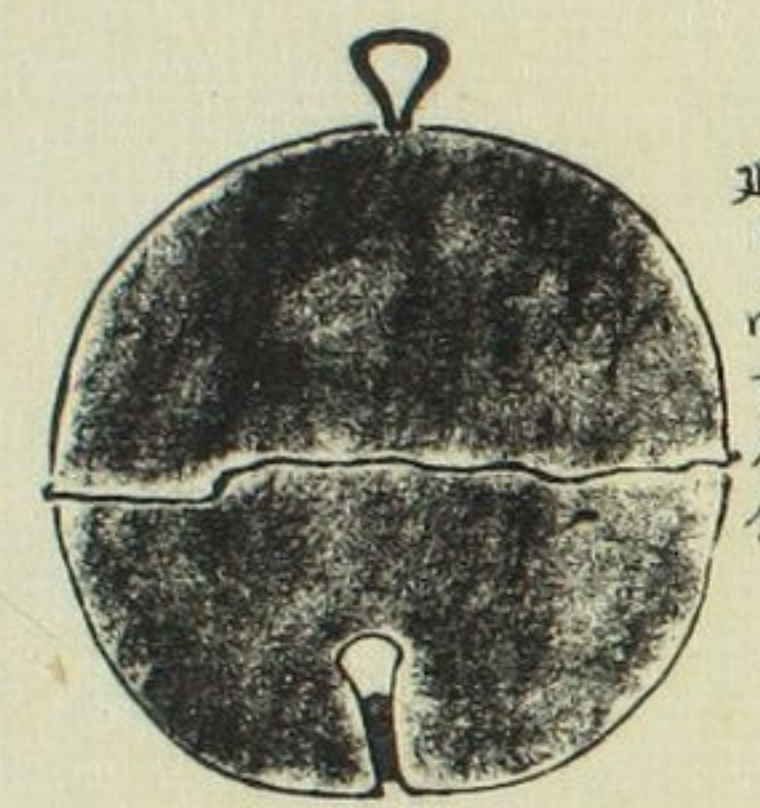
長子八幡宮  
神寶の圖



七寸七分

長サ四尺八寸八分

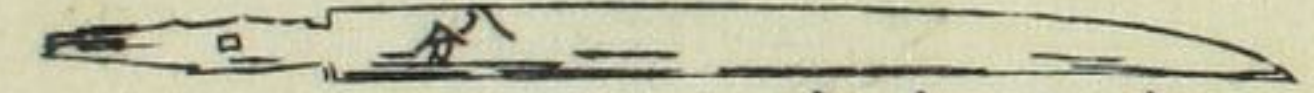
鈴 袂



言サます八分  
廻り四寸八分

刀 本

七寸八分心中



寸 天 天



分 尺 寸 三 天 寸

十 三 寸 菊



此舟を色をせとわろろを浮洲子傳あるを此舟もさや  
うふして彼此の岩れ岩れもたあ次上つ瀬を松皮の  
大滝多子流鳴流尾流流とるふれ流つ瀬とるふ子響  
るそて流るるぞと下し得は凡上流も居る村これれれ  
て炭やまてか守流づ〜ひ小灰出何多を流流といふ細虫  
る小船もほ〜を流れらるる小順ひは津ま〜  
危ふ〜

黒鳩瀧 津尾村に小属次日

朝日明神社 津尾村にありて祀る神流る〜代社地小きさふ尺津此石礫石りてま  
文字此と終子よ

鳴瀧 日向川中村にありて南より小川向ひて流れ奇巖怪石も居る小流流〜毎流其  
神代祠

矢苦嶽 村の中を流れ一ふ〜田尻越門二  
村の留山崖を穿てる中流流

勢川瀑布 田尻村より南山中へ入る  
うま里許小なり言二十丈

勢川川沿つれけ流より朽葉小よごめ子あり上をともめ  
ゆけが流れ着矢苦が嶽れ葉もとらさて流をともせ  
る楓れ林小白る葉れれ〜川がめぐりて石小流は林  
をららちもいも次夏流のみどり此美を重み小所〜せれも  
あ〜流〜折〜も室〜さ〜し〜れ〜く〜〜此巖の岩  
を割りて書志〜せる欵

い〜勢川南雲とも〜風あり〜定る流の書とむ〜法平

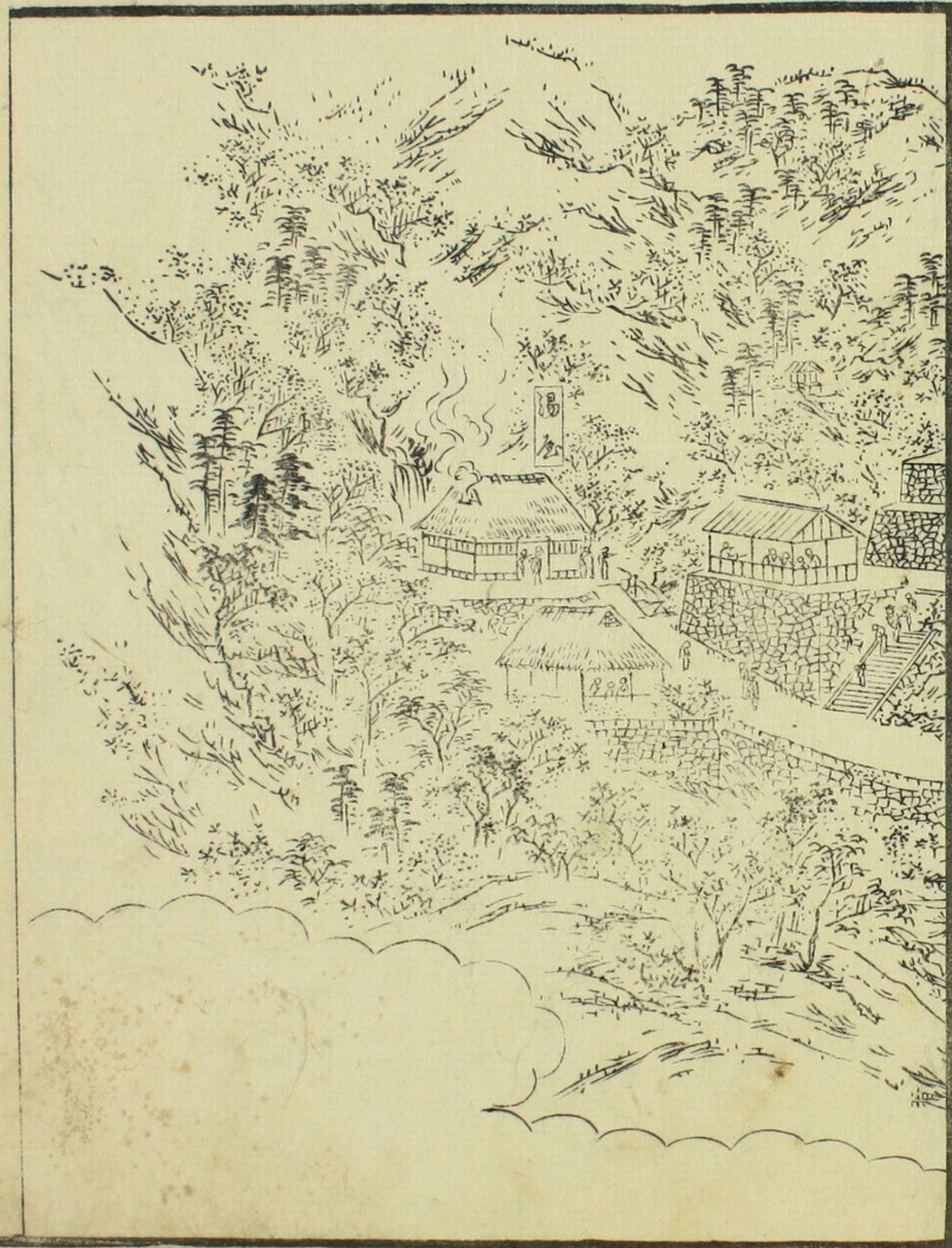
長子八幡宮 小倉村にありて名出子あり九ヶ村の産土神なり祭れ八月十  
八日言り〜し〜し〜神宮小津古流本力言れ古物あり又〜と〜乃

神子神社 神子村にありて二村の産土  
神流る〜し〜し〜し〜

神場温泉 上河海川の所にて字を神場といふ  
田尻より〜し〜し〜し〜

は地上初湯川松谷といふ二溪れる小流〜そ北を白馬此言





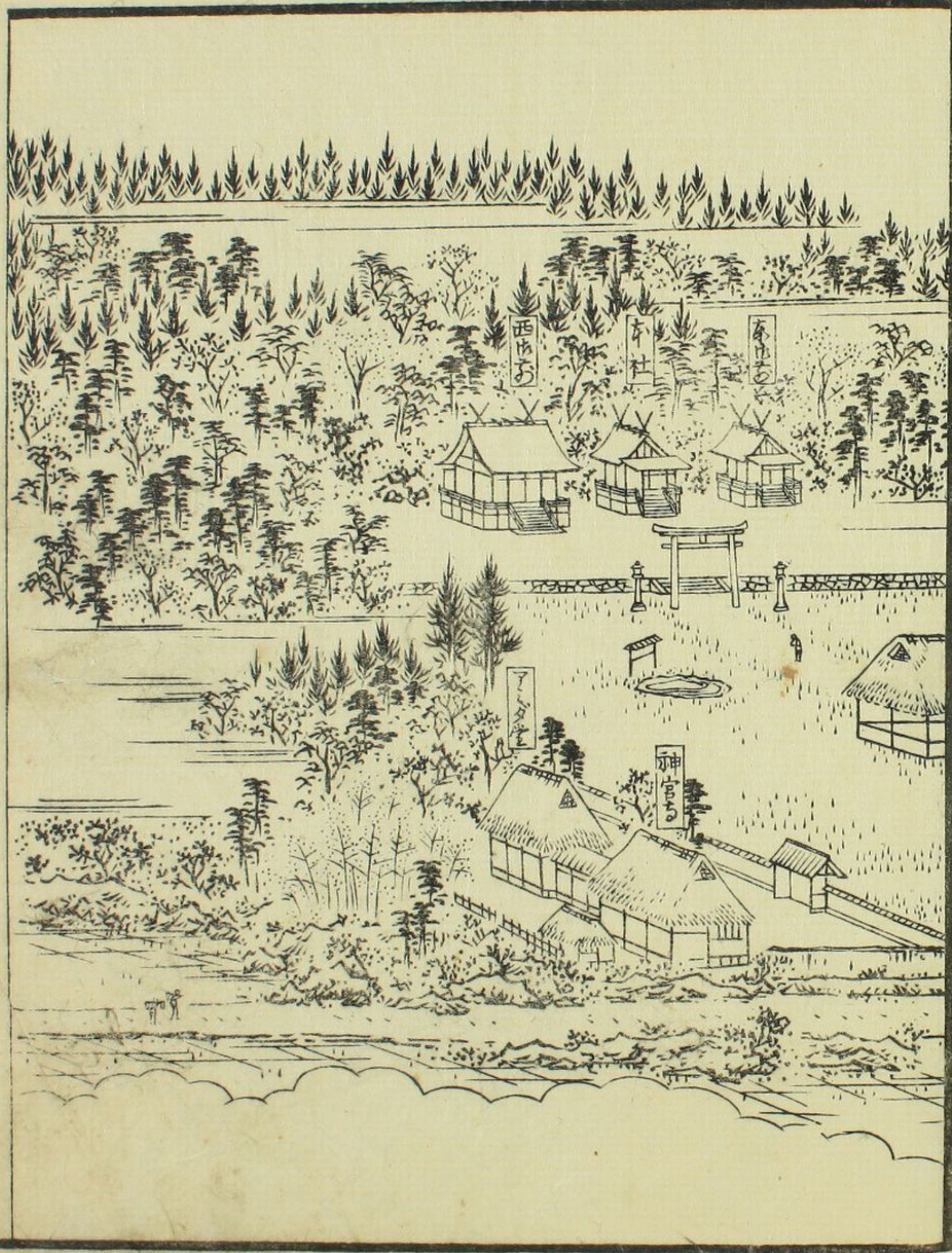
神場  
温泉



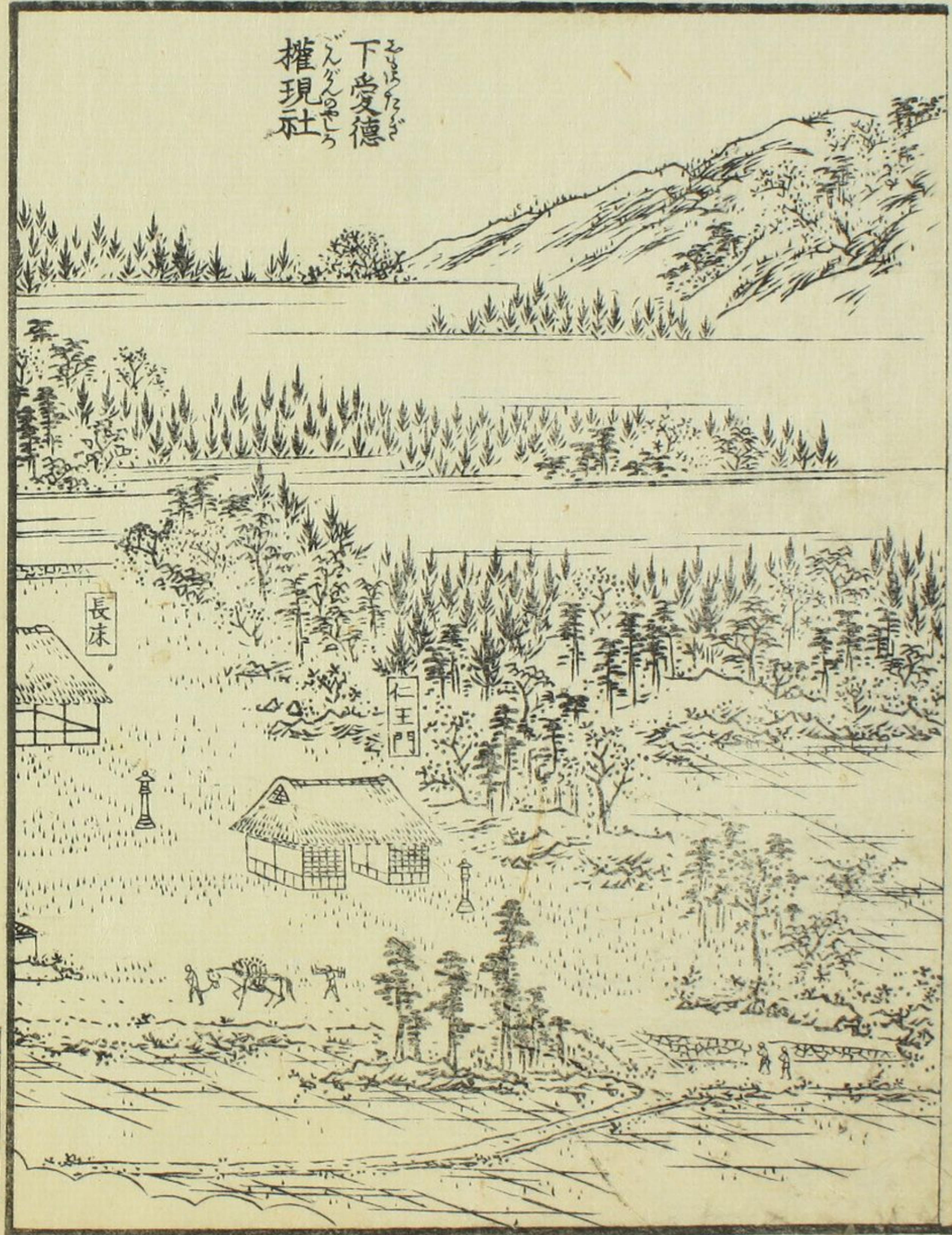








下愛徳  
権現社

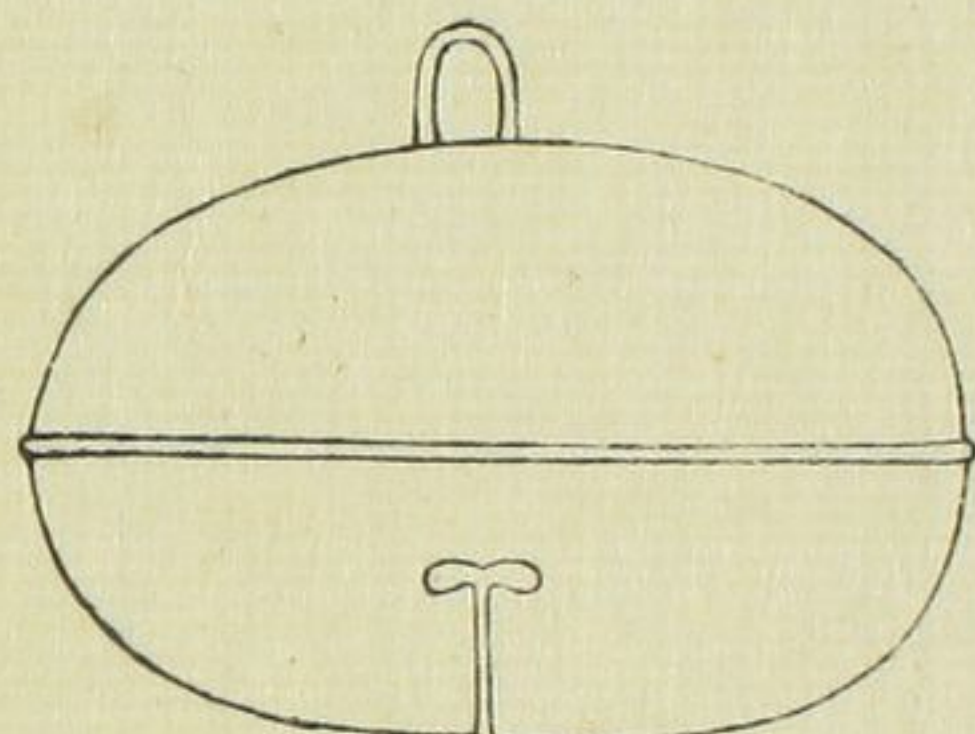


下愛徳

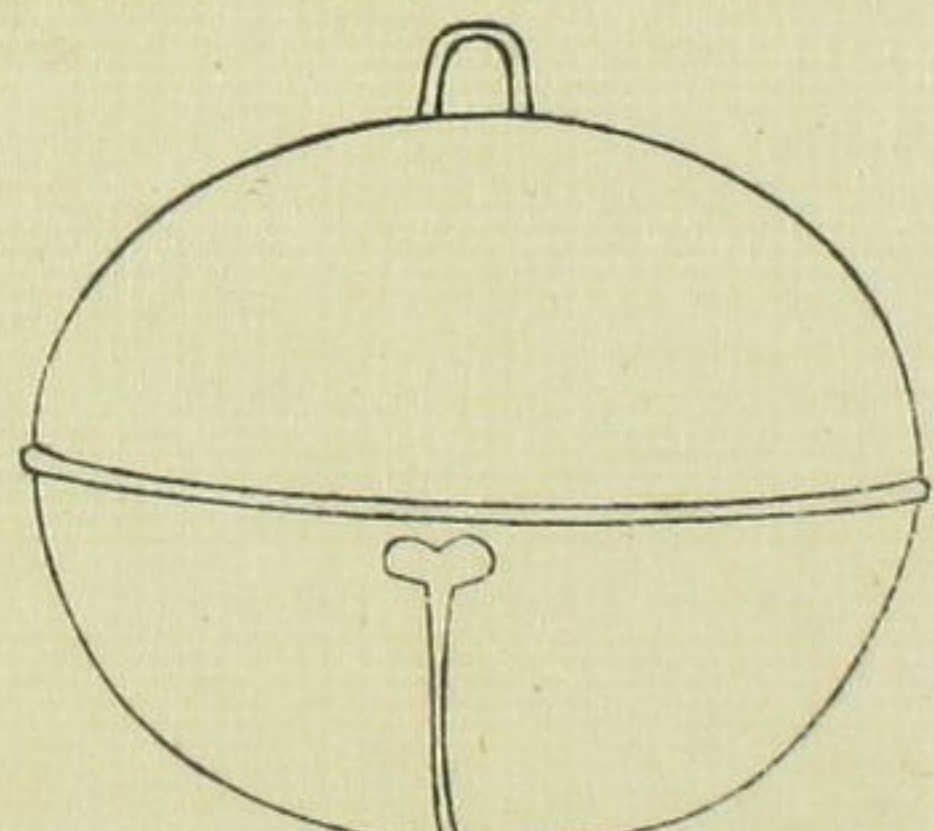


下愛徳権現  
神寶古珍の圖

ツマニヨリ  
冷口マデ寸四分



合九寸四り廻



寸九分

寸八り廻

の神名を著せる中、小を徳権現と見え、このもい二社と稱す。兼て  
明徳文書主田助  
純世撰も小あり 又、高幸紀小を徳山王子と云々たるも、當社より分  
ちおれる祠あり。一、當社の神宝、小古珍、六つり、以て近々天徳二年  
丹に宮と云々、小徳神池、小より、新宮の寶殿、小納、小、種々の神  
寶、此中より、鉛書、小、新十具を、分ち、其、以、宮の神寶、と、以、  
神の類、ひ、ま、地、と、以、徳紀、小、え、ま、り、出、る、小、と、以、て、後、記、也、  
況と、出、せ、近、と、口、と、る、れ、か、と、  
い、れ、た、は、ら、ら、ま、る、矣、小、一、と、れ、た、  
れ、ま、小、は、ら、は、形、を、下、小、ま、り、 又、如、  
大、文、部、を、以、て、中、二、百、二、十、一、年、の、後、小、徳、永、女、二、年、乙、未、九、月、  
願、主、比、丘、幽、仙、菴、主、と、り、も、ど、其、傳、傳、分、り、以、年、中、れ、な、る、式、月、  
七、日、小、ら、右、名、諸、的、を、行、る、的、事、れ、下、小、本、れ、獨、と、り、是、也、海、  
く、れ、れ、を、建、登、と、り、一、と、つ、じ、本、と、り、射、率、と、り、後、  
其、本、神、殿、小、納、を、倒、と、以、と、り、何、の、お、と、り、初、め、と、り、  
一、又、社、小、十、八、人、と、り、梅、次、小、神、と、り、初、む、る、小、齋、戒、と、り、



髪を剃ら次七ヶ度湯漬の漬小出て垢剃りてつゝ  
 十一月廿七日子刻小松の八角の玉串十二奉と神赦小  
 納めて小松安令を繕るを神終と次神を並川  
 建保縁起天喜小元弘四年二月八日於高家東光寺邊馳惡筆了云とわれ  
 とも文中を考ふる小建保四年小壽るを寫し改めたるなりとて  
 孫起小出せる建保大津の海傍に小松傳説とおかしのれど  
 系文を御しつゝ文のれが要をつつてた小我と  
 くらふあゆみふとよひ大男女世を始め終ひし時古  
 志れ行通七日仍く和泊無々れば神とありをほく  
 らむと思し食く宮を出て其好小御坐ありてつゝ  
 了らむと昼つゝ多へば夜宿と七日其後之夜作  
 多ふもつゝり堅めり次梓春れ小をさして法神小  
 若て宣へく吾は泊地らんとあひしとらんと愛小造り立  
 るるを得次志て意多すと宣ふ時小慈照神を彼泊つ  
 くらんと思し食し梓春の神小白く多くと系彼

泊つゝれ小あくと三日も七日まゝ一月あはまも  
 といふれる小他とて三年ありあれとてえもほへ共と  
 ひ多くとて出でて件れ泊小御坐ありて作らむと間  
 と泊れ中小籠の亦を作らして坐次小大駱出来て和  
 ろらる香まらして三年あはむぬ時小梓春の神乃思  
 し食し強くと慈照れ神之小あなれどるも次を君  
 とひ多へと云ひし物をと思し食して出多ひて軍武男  
 河須賀大明神を彼泊小率るく御覽し多ふ小大駱此  
 為小各れ多ひて海は危小比岐かきませば梓春乃  
 神誓たりし歎き多ふ小河須賀神申多ふやう如何ハ惱  
 みありするらる系新出しなるんとて湖押あて外よる  
 河須賀神好まへ内よる慈照の神好まへ内よる外より  
 切多ひて新出しなる共時梓春の神宣く系新小彼



泊つらんせしむもつらんそを継ぐして之をぬ  
わらふ子親れ族多るれば彼等故とねらひまゝに今ハ  
塩氣離れて也かゝれば小ゆのこは御を尊て守護り  
多へと宣ひしうぶ然也神共云小延いて海の小と  
尊のて西よると東巽小出ゆを路小御よるしひと千  
元此御衣曾千冠潮小膝浸し多る次奇しと神  
つさあて行多ふ以下長寛御文小引これ神意縁起  
小好く然也於小叙しと下

鵜口一 貞永十一年此流河其化實徳三年修治の  
簡北此三年天正二年上梁此れ等あり

寒川社

何上名の事小引つて十四ヶ村を治ぶと實徳社の  
社を川氏小治る其の事此女書を記む下と云ふ

謹令言上公持家お男上と事不立と依流罪自去年  
寒川山居仕の俊幸と東帰國と俊倫と俊神と立寄位  
上早連信長に致出此流前と孫末と申ぬ存分於本  
と者當言一社を私造位仕と寒川と申候於末代

紀西編五ノ本三

不可な疎畧也仍願状如件

天正九年正月吉日

修久間甚九郎  
字榮

上愛徳六社権現社

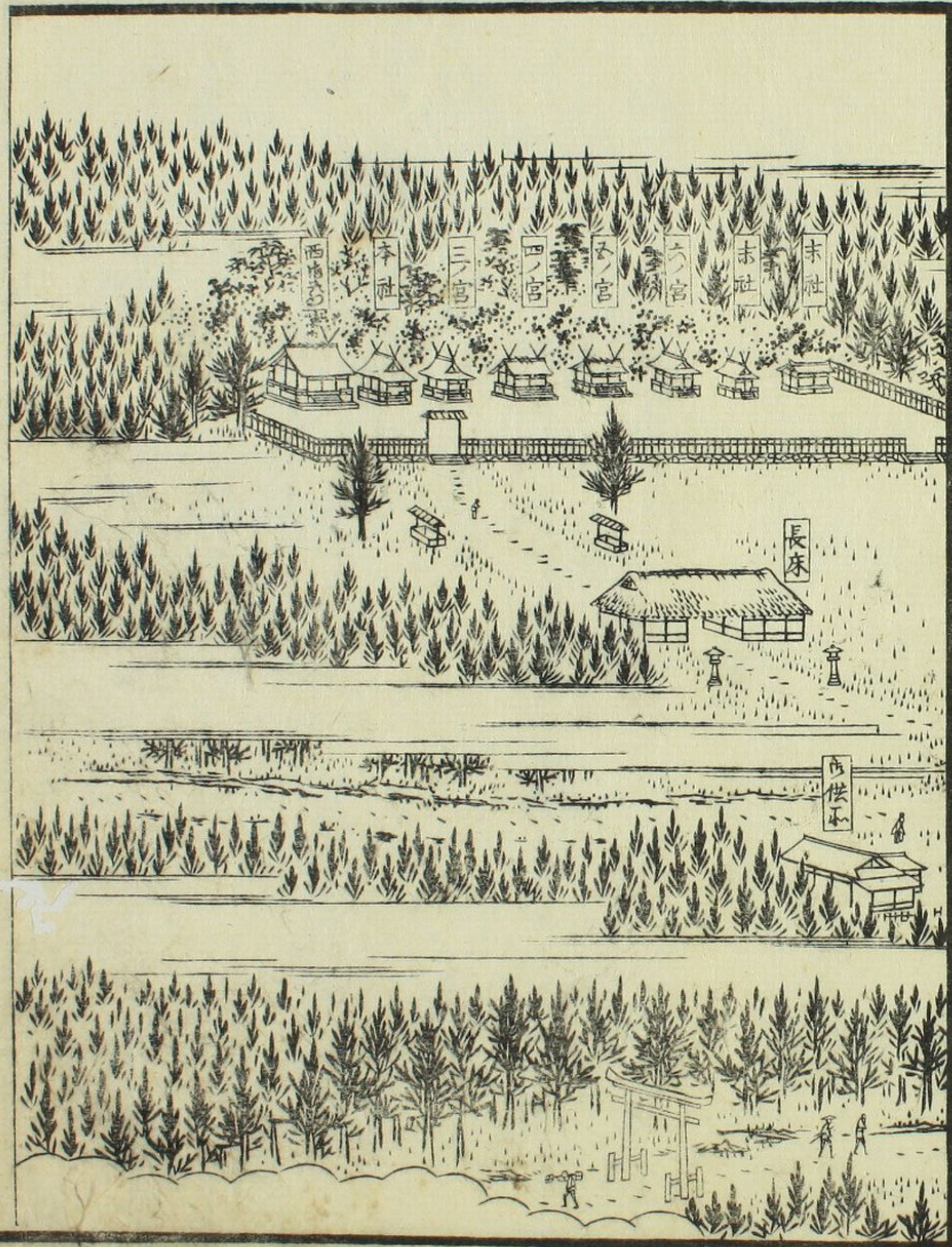
笠取村外此屋小引を境  
内東西二町南小二町

本社三坐西御前三座之宮三坐四又六の二又各一坐とて  
然跡十二小此神を祀るといども社の敷を以て六不権現とい  
ゆる八ヶ村の春と秋小志て涼林の中多れば社殿備をれり  
知法此るうと下也徳の條下小の條が如し例を二月十  
八日祭式古風を存せり神輿此先馳小長刀を携ちゆく  
り神終らんとつて又童子神前小て神意を奏す以  
其意致も古維より日を迫り茶湯の掌境内小充  
満し徳高田方より来たると法物を齎しりり多る年令小  
乃ふといふ林をを川  
集といふ

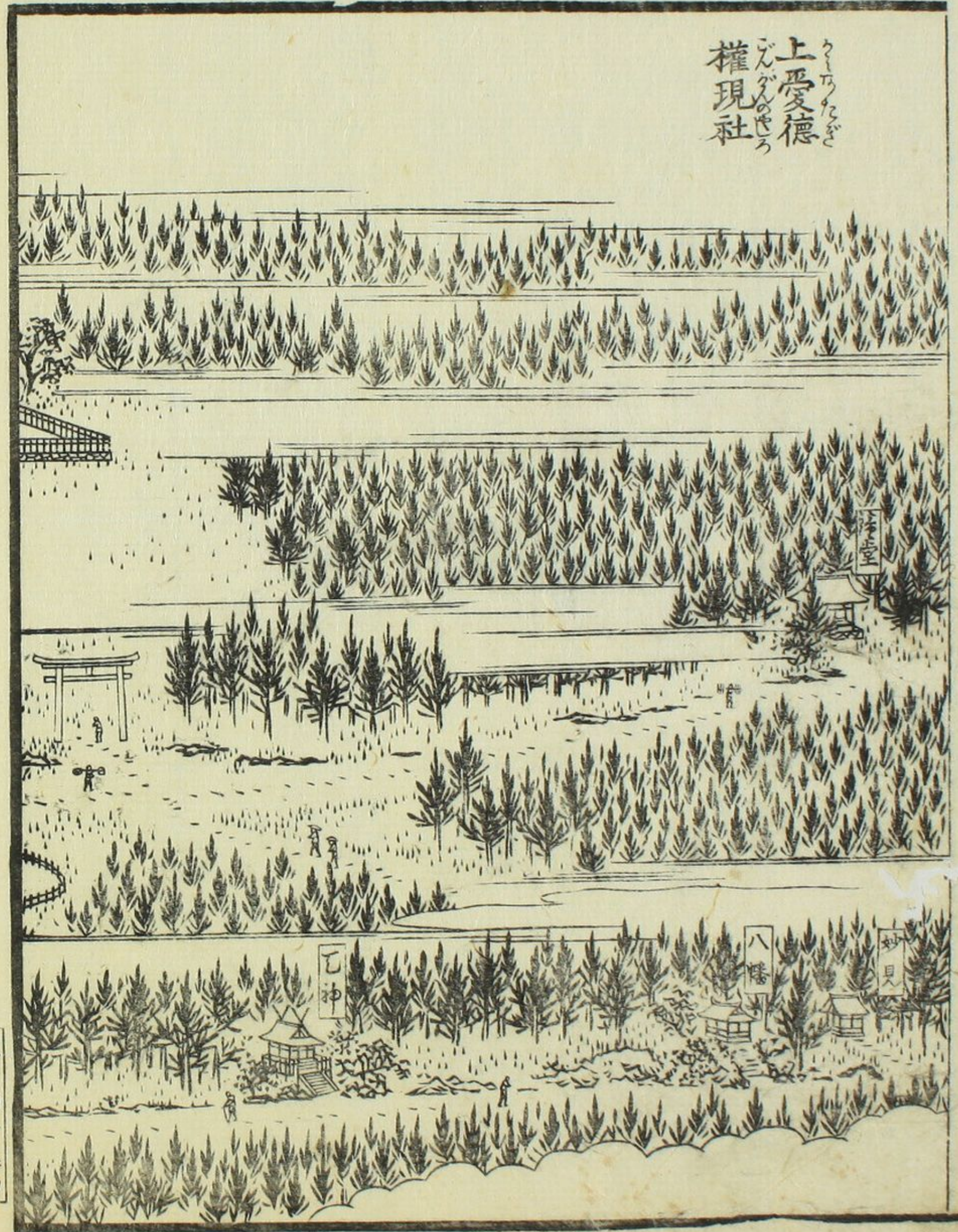
大龍

本村より西日川流一町許に居龍湫急流小  
して後をせにあり儀の畧を案らるるをを





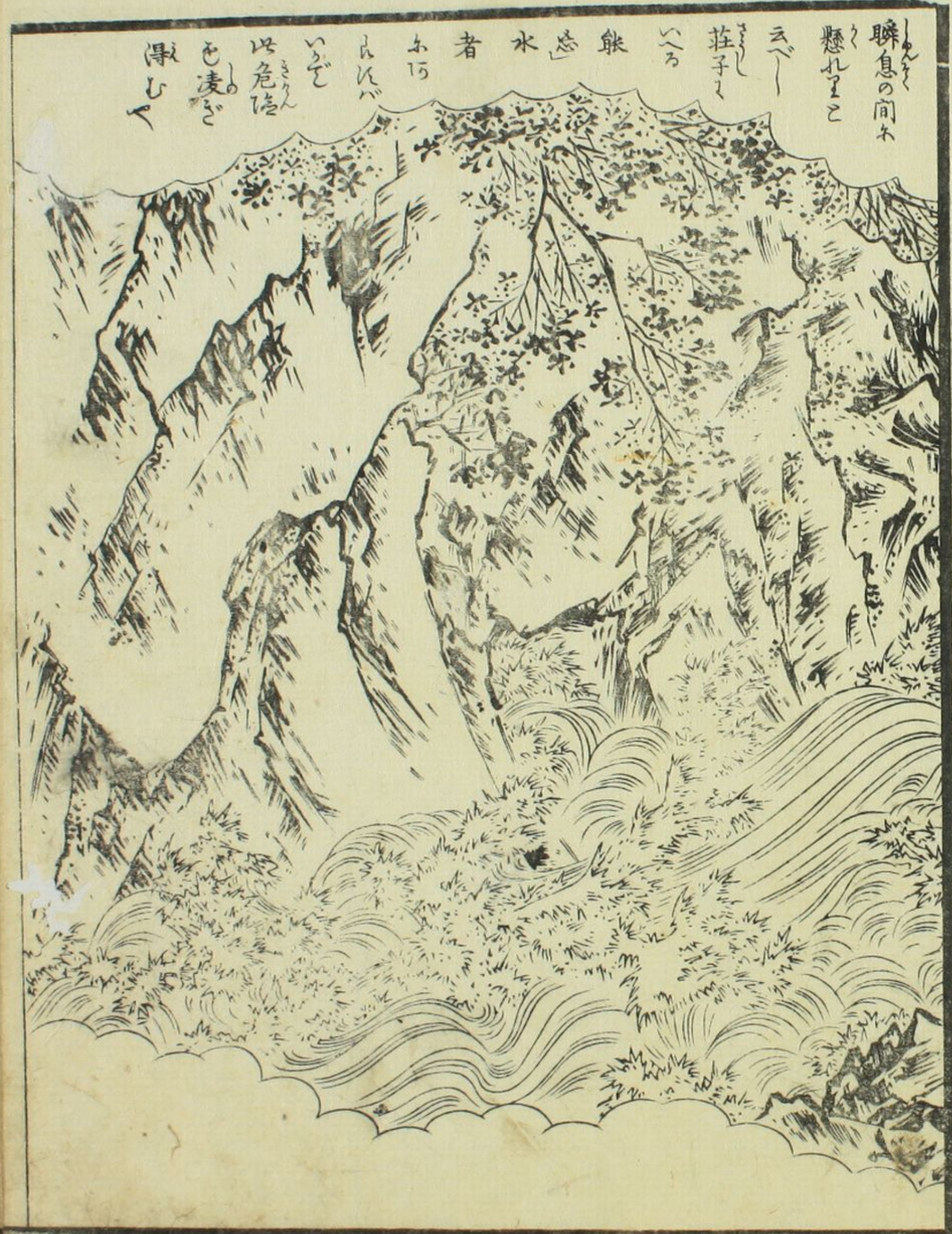
上愛徳  
 権現社  
うしあいでん  
 けんげんしゃ



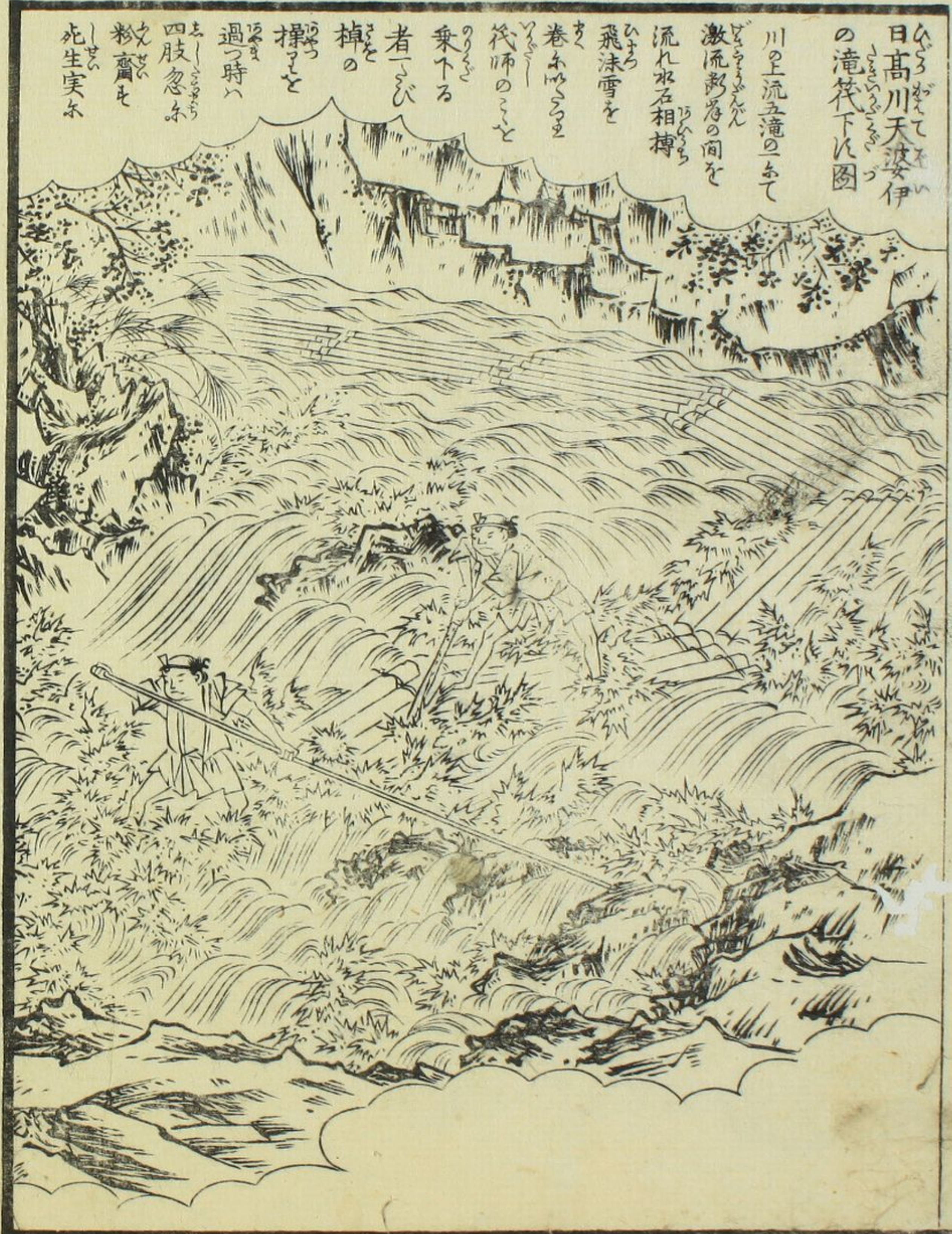








瞬息の間  
 懸れに  
 云へ  
 莊子  
 へる  
 能  
 忘  
 水  
 者  
 者  
 此  
 危  
 凌  
 深  
 じ  
 や



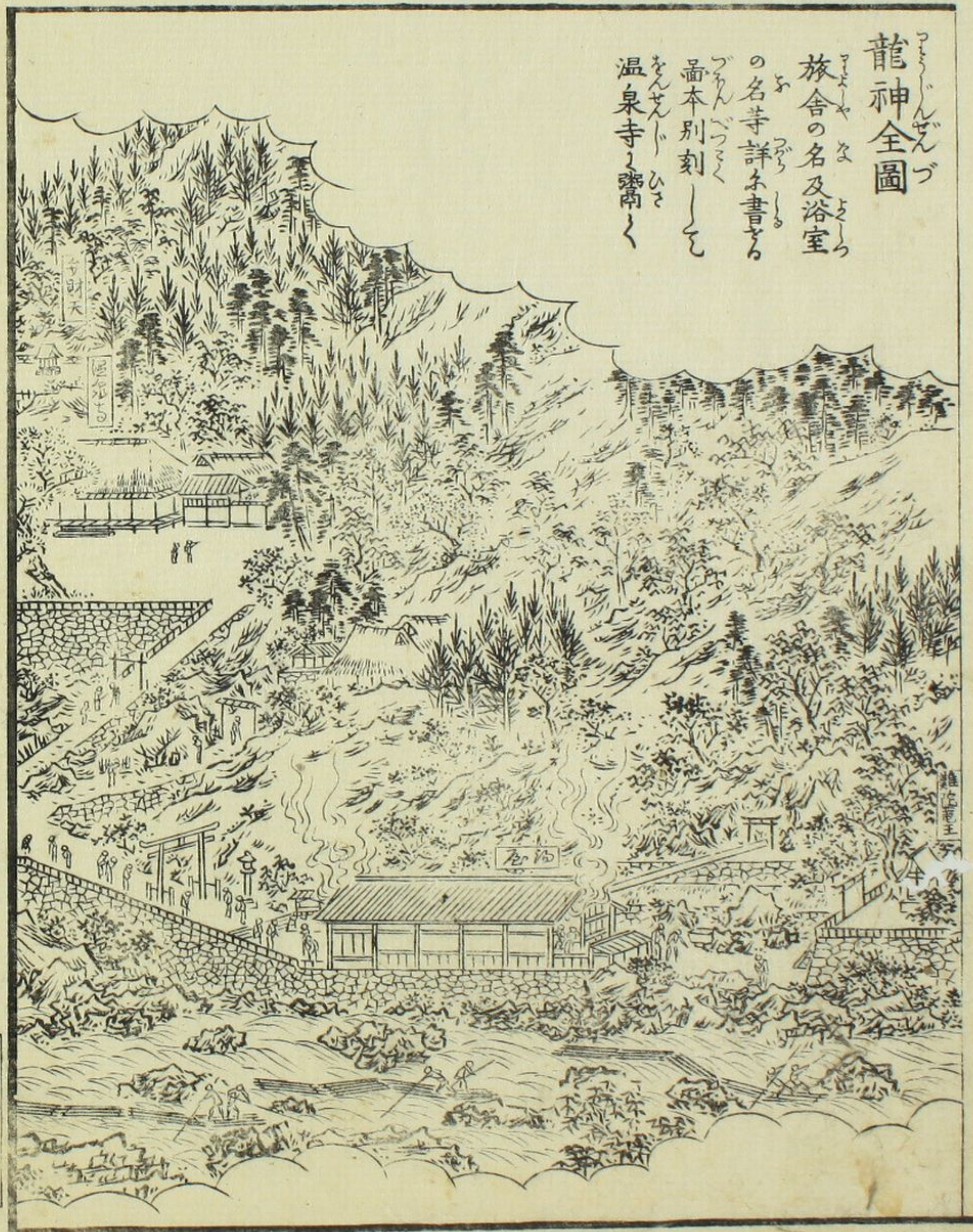
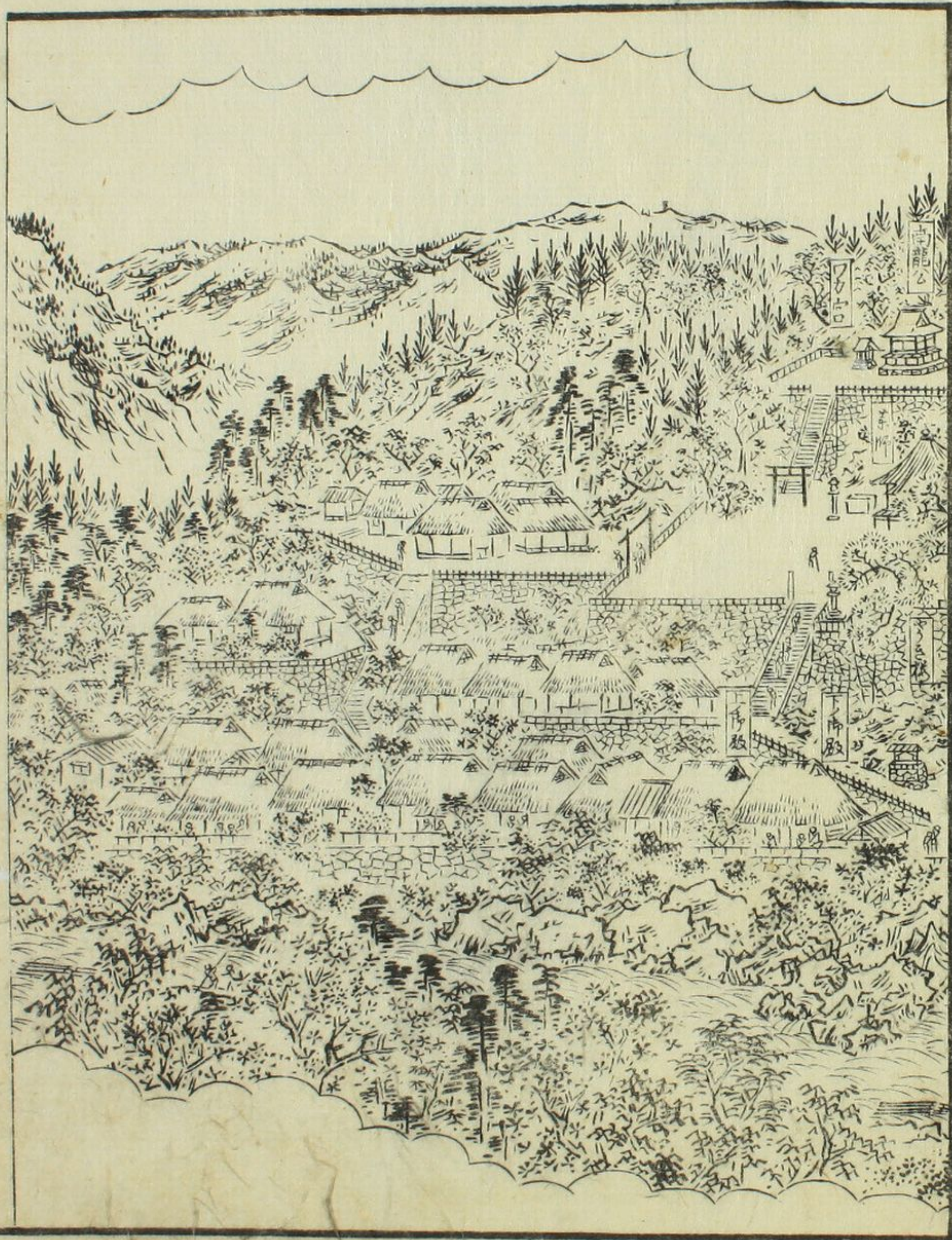
日高川天波伊  
 の滝筏下図  
 川の上流五滝の  
 激流激湍の間を  
 流れ水石相搏  
 飛沫雪を  
 巻ふゆらぎ  
 筏師のこ  
 乗下る  
 者  
 棹の  
 操  
 過つ時  
 四肢忽  
 粉齋  
 死生実

日高川天波伊  
 の滝筏下図









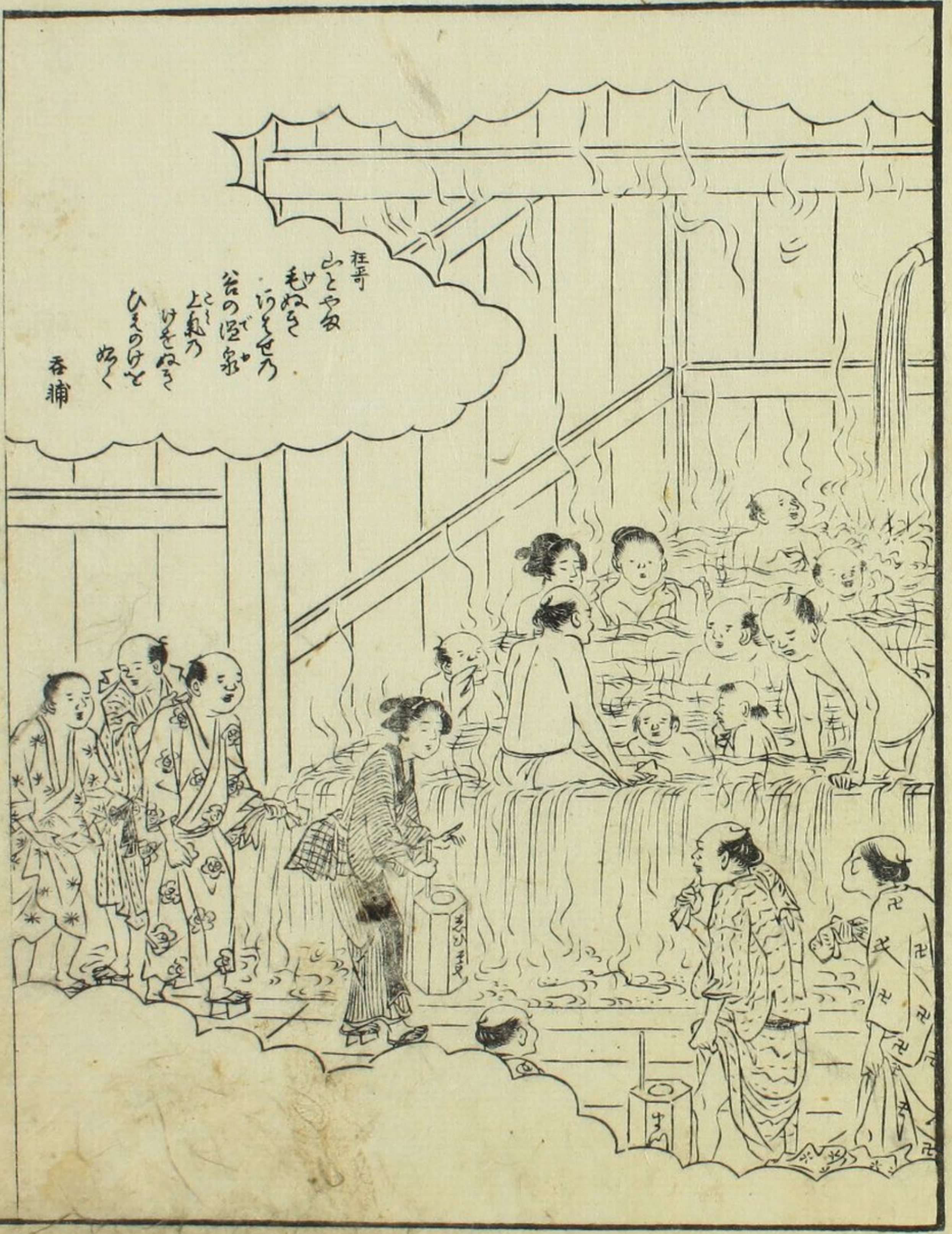
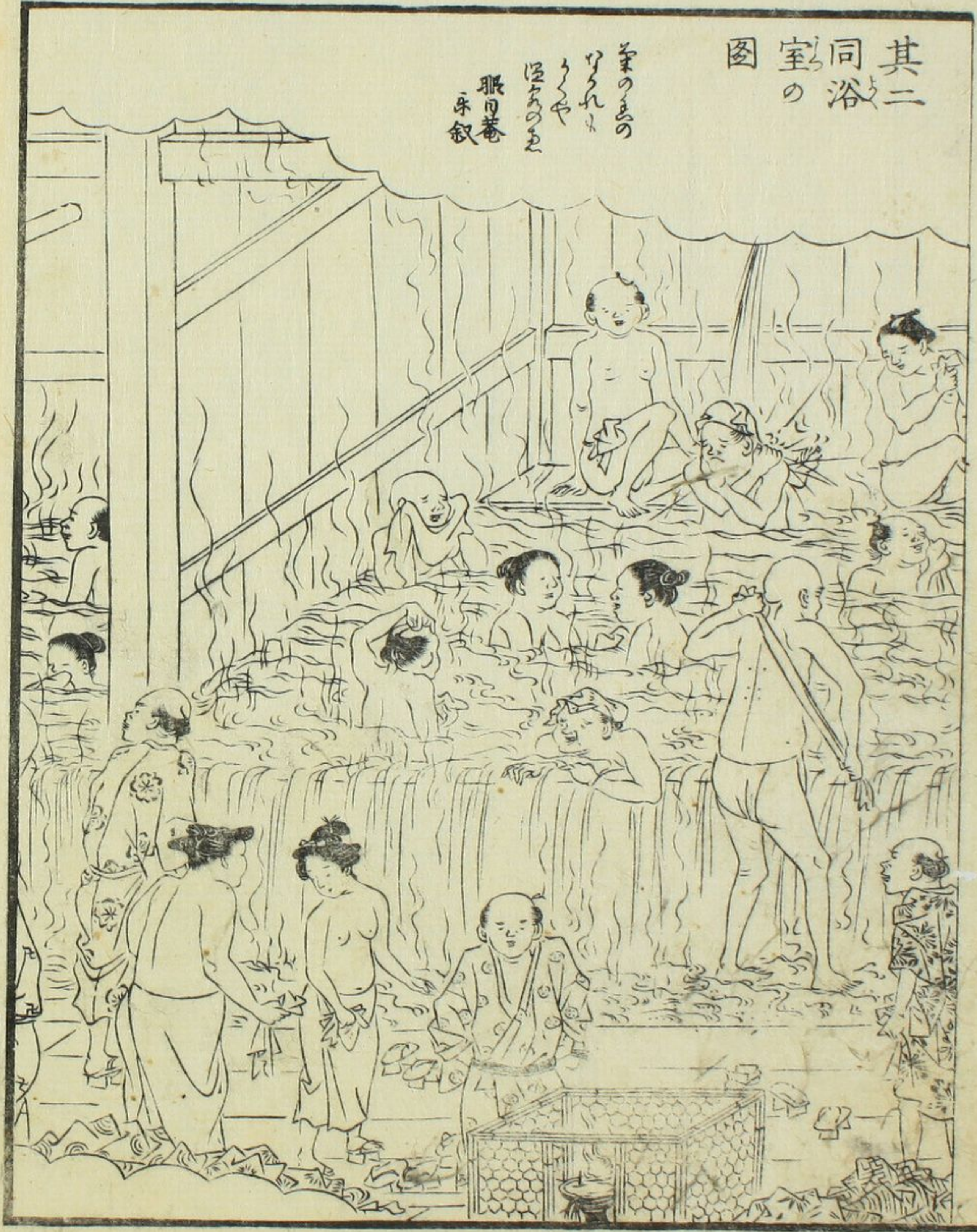
龍神全圖

旅舎の名及浴室  
 の名寺 詳々書きたる  
 番本別刻しし  
 温泉寺と齋く



其二 同室の浴

茶のまの  
ひんれい  
うぐや  
ほろのま  
服目巻  
手叙



狂言  
山とや奴  
毛ぬき  
らとせり  
谷の温泉  
上敷乃  
ひそぬき  
ひまのひと  
ぬく  
吞捕

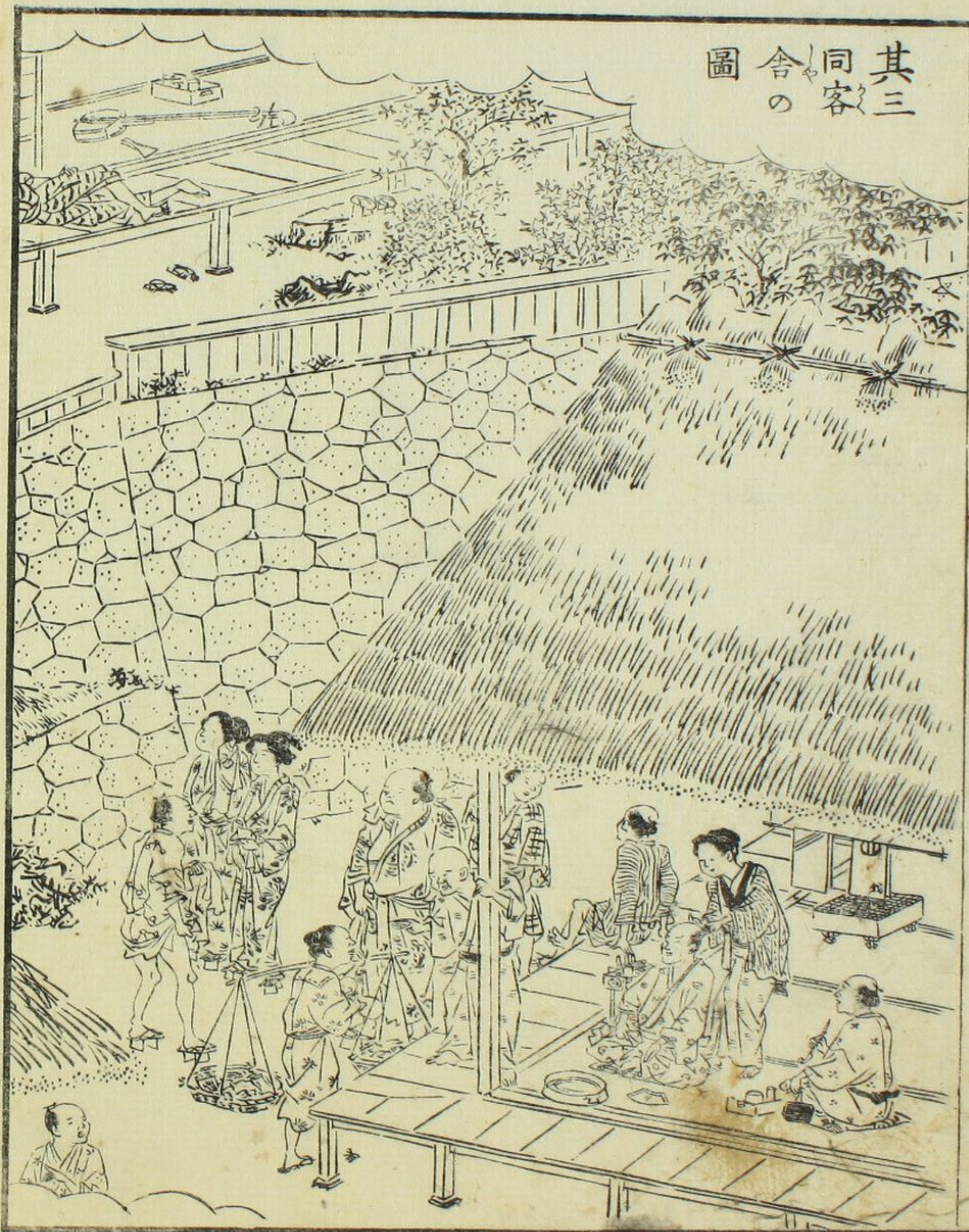
同室の浴





湯  
 まじ  
 その瓦を  
 まき  
 法  
 橋

其三  
 同客  
 舎の  
 圖



三  
 同  
 客  
 舎







竜神邊の村家  
 舟を製する



紀四編五七十一

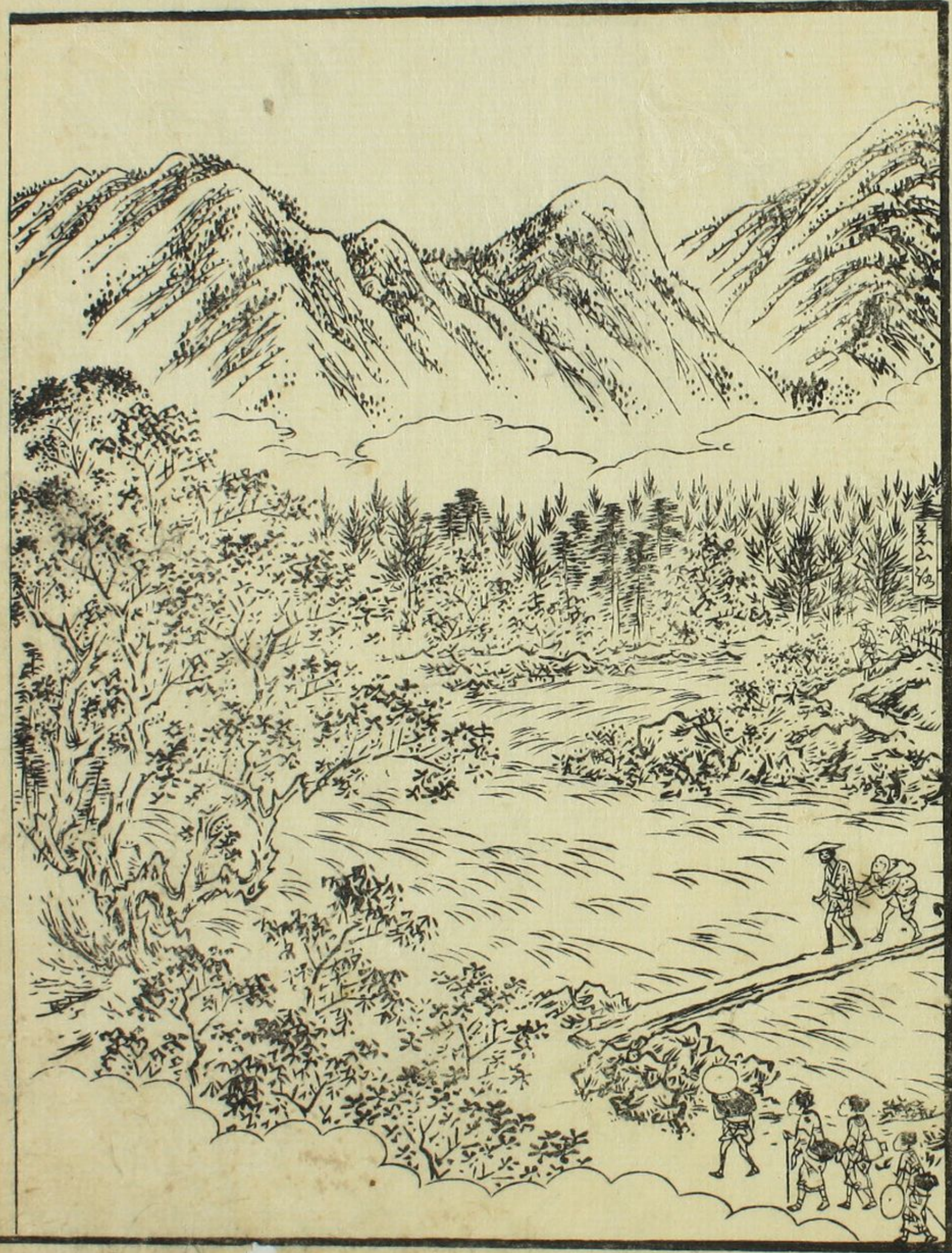
龍神邊の諸方の路次  
 龍神邊の諸方の路次  
 龍神邊の諸方の路次

- 大坂道 殿垣内 二里
- 若山道 殿垣内 二里
- 南郡道 遠井辻 三里
- 田辺道 下柳瀬 六里
- 日高往還 下柳瀬 六里
- 天田 二里
- 新 三里
- 高野大門 三里
- 清水 寺原 二里
- 山東 一里
- 野上 八幡新 二里
- 南部 二里
- 秋津 二里
- 田邊 一里
- 寄之原 二里
- 印南原 一里
- 小森 一里
- 笹茶屋 三里
- 神野 市場 一里
- 輕井川 二里
- 名之内 二里
- 上洞 二里

水乞鳥  
 龍神邊の諸方の路次  
 龍神邊の諸方の路次  
 龍神邊の諸方の路次

川鳥







すま  
てん  
龍神  
の面  
かろ  
一  
陽



母の谷

城が森  
の鼻  
六里  
を  
し



紀四編五七十四







紀四編五下六



